

昆蟲

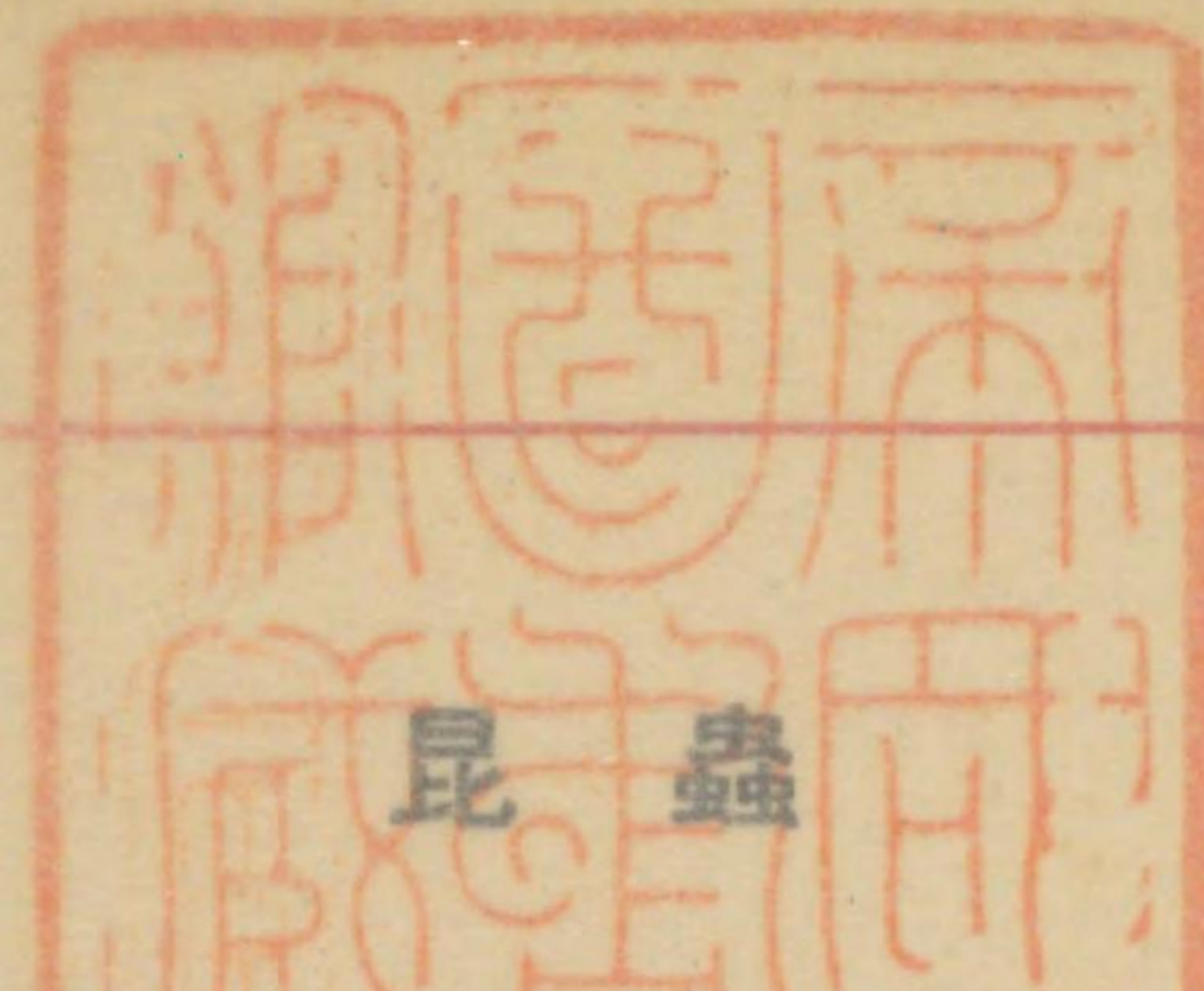
生本能寫眞の寫し方



760
15

349

1937



昆 蟲
生態寫眞の寫し方

加藤正世著

東 京

厚生閣版



加藤正世蔵



昆蟲
生態寫眞の寫し方

加藤正世著

東京

厚生閣版



760

15

緒 言

生態寫眞は最近科學者以外の人達からも注意が向けられつゝあり、これが流行を見るも近き將來にあることゝ信ずるものである。著者は昆蟲研究の一助として生態寫眞を研究して居るのであるが、現今此の種の指導書が皆無の状態なるに鑑み、寫眞家の參考書として上梓する次第である。漫然とカメラを携へて昆蟲の姿を求めるよりは、先づ以て豫備智識を得て後行へば得る處が多いことを確信するものである。

著者の作品は著者の主宰する昆蟲趣味の會機關誌『昆蟲界』に毎號發表することにして居るし、又會員の作品も多數發表されて居るから、これも併せて參考と致されたい。讀者各位の作品もこれに發表せられることを希望するものである。

昆蟲趣味の會の構内は昆蟲の生態觀察の爲、棲息に適する種々の設備を施してあるので、生態寫眞撮影上にも種々の場面を得ることが出來、従つて寫眞

家の舞臺として好適であるから、讀者各位の希望者には開放したい考へである。御遠慮無く來訪せられたい。

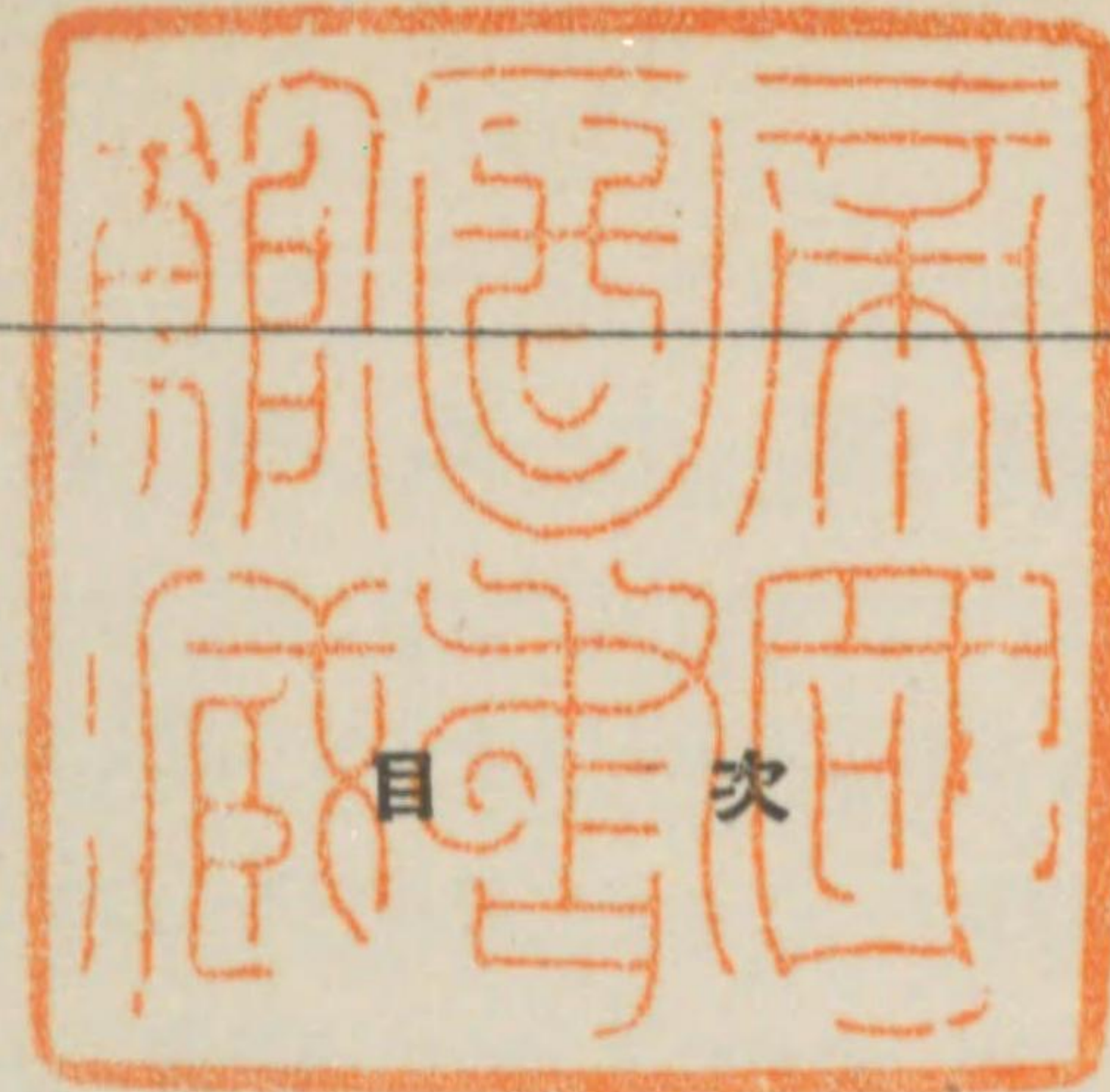
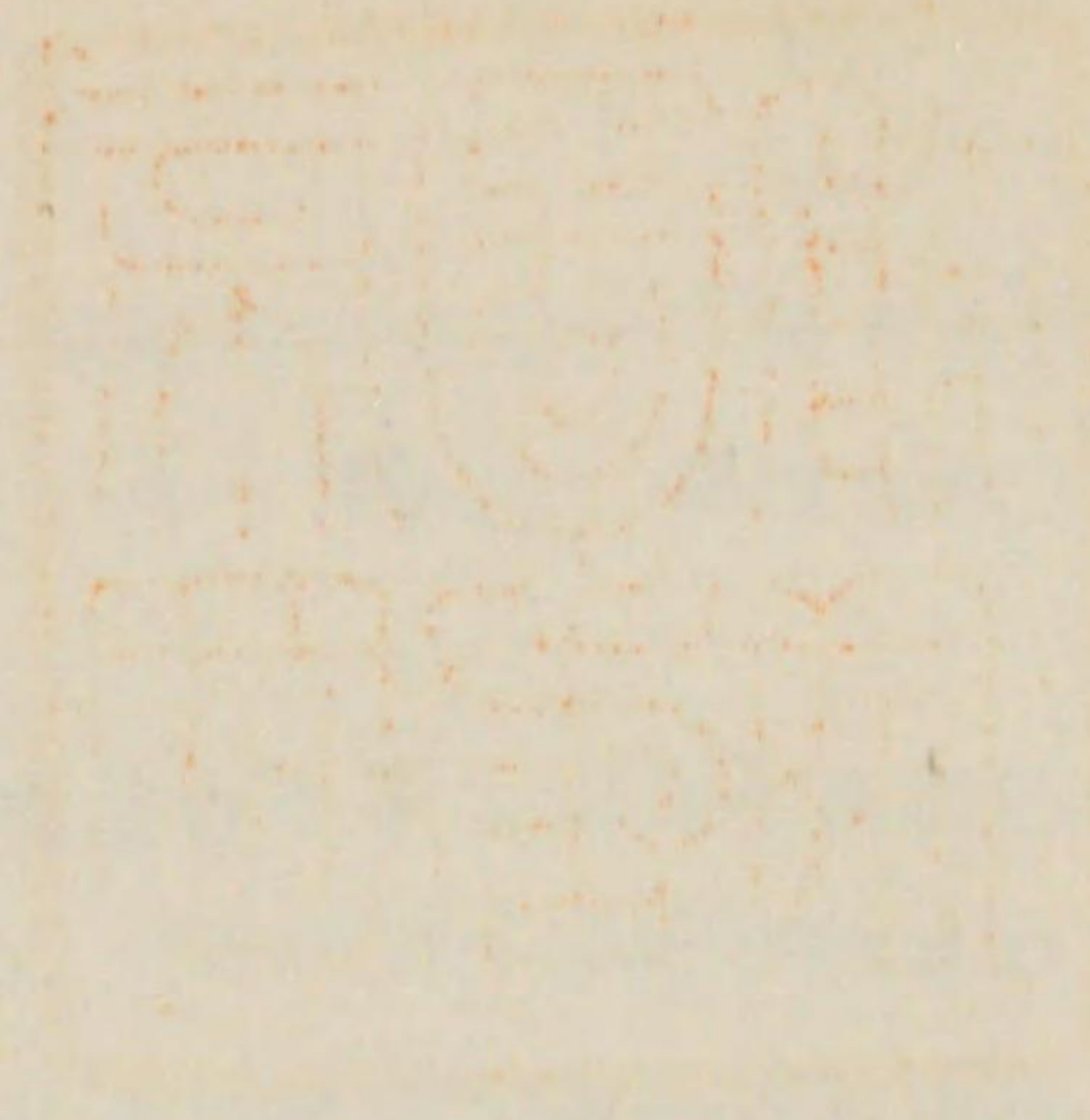
昭和十一年師走

東京市板橋區石神井公園

昆蟲趣味の會 加藤正世

凡 例

- 1 本書は生態寫眞を試みんとする寫眞家の參考として著したものである。
- 2 本書に挿入の寫眞は總て著者の作品であつて、過去五年間に於ける收穫中より撰んだものである。爾後の作品は今後一ケ年間の作品を纏めて年刊として出版する考へである。
- 3 寫眞には一々日附、場所、Time等を明かにして置いたが、カメラは特に記入してないものは總てR. B. Graflexで、レンズは2594年までのものはTessar 1:6.3、その後のものはDagör 1:6.8である。絞りは開放で寫したものが大部分である。
- 4 昆蟲名には別に學名を載せて置いた。學術上から參考とする場合に必要であるからである。
- 5 撮影した寫眞の昆蟲名が不明の場合、著者に寫眞を送られ、ば御教へしたいと思ふ。總て返信を要する場合には返信料を同封せられたい。



第一章 生態寫眞	(2)
第二章 繪としての生態寫眞	(5)
第三章 生態寫眞用のカメラ	(8)
第四章 乾板とフィルター	(10)
第五章 撮影上の注意	(11)
第六章 昆虫の世界	(13)
圖 說	(Pl. 1~Pl. 74)

第一章 生態寫眞

生物が生活して居る状態をありのままに寫したものが生態寫眞である。動物園のライオンや鉢植の高山植物では絶対に生態寫眞は出来ない。それは單なる生物寫眞なのである。生態寫眞にはその生物が生存して居る地方の背景を必要とするものであつて、眞の生態寫眞を得る爲には、千里の道をも遠しとせずその生存地を訪れなくてはならないのである。其處に生態寫眞の眞價があるわけである。

昆蟲の生態寫眞は鳥や獸類の如く特別な装置を必要とせず材料も我々の周圍に極めて豊富に存するのであるから、題材を得る上からも最も都合がいゝのである。又昆蟲の生活は甚だ神祕的なものであるから、他の生物に見られない色々な珍しい寫眞を得ることが出来るのである。ファーブルの昆蟲記には色々な昆蟲の生活状態が面白く述べられて居るが、これは昆蟲生態寫眞家の是非一讀すべき好参考書である。

生態寫眞は從來科學者の獨占物の様なものであつたが、最近一般の寫眞家がこれに関心を持つ様になつたことは誠に我が意を得たりと感ずる處である。生態寫眞は多くの人が考へ

て居る様に難かしいものではない。技巧を要する寫眞の様にポーズだとか構圖だとか云ふ様な事は大して必要の無い事で自然の有りのままをキャッチすればそれでいゝのである。これに技巧を加へればそれこそ自然の破壊である。それに相手が自然物であるだけに極めて奥深いものであり、一旦手を染めたならば興味の盡くる處を知らないであらう。

花を訪れる蝶、空を飛ぶ蜻蛉、林に歌ふ蟬。夫等は總て彼等の一生涯の一部である。我々は随分無駄に時間を潰して居るが、彼等の一生には全く無駄な時間を與へられて居ない一舉一動總てが生きる爲の動作である。さればこそ闘争もあれば戀もある。

蝶が花から花を訪れ、赤蜻蛉が澄みわたつた秋空高く飛び交ふは一幅の繪であるが、科學者の冷たい眼を以て見れば、それは食物攝取の動作に他ならない。畫家はこれを繪として花鳥圖と名附けるが、絶対に花に來ない蝶を花にあしらひ、春型の蝶を秋の花に配する等の暴舉を敢てして居る名畫伯がある。我々の眼から見ると一枚何千圓の正札も一錢の價値無きことになる。その點生態寫眞は絶対に斯かる過ちを犯すことが無いのである。

現在の寫眞術はその性質に依つて人物、山岳、風景、航空

等種々の部門に分れて居るが、生態寫眞は夫等とは全く別の
ものであるから、特に「生態寫眞」として、獨立した部門を
設くべきであらう。而してこれを發達せしむる上には生物學
者の言葉を參考として、眞の生態寫眞を得ることに心掛くべ
きである。

第二章 繪としての生態寫眞

花に蝶——それは靜と動との調和である。自然界の調和で
ある。花は蝶に依つて實を結び、蝶は花から得る蜜に依つて
生命を維持し得るのである。自然の調和は我々の見た眼にも
美しいものである。

生態寫眞は無味乾燥だと云ふ人が有るかも知れない。然し
それは無味乾燥な寫眞ばかりしか見ないからさう思ふのであ
つて、繪としての考へを加味しないものはどうしても味が無
くなるのは止むを得ぬことである。それで著者は特に此の點
に留意して、繪としての生態寫眞を作ることに苦心して居る
次第であるが、自分ではよく出來たと思つても他人が見れば
なつてゐないかも知れない。その邊は讀者諸賢の判斷におま
かせしなければならない。

それならばどうすれば繪になる寫眞が得られるかと云ふと
それはピントグラスを覗いた時に蟲體とバックの均合で決定
するのであつて、いくら昆蟲の生態寫眞であるからと云つて
昆蟲だけが中央に大きく寫つて居たのでは役に立たないので
ある。それが止つて居る植物なり花なりがあつて繪となるの

であるから、餘りに生態寫眞だと云ふ觀念に捉はれ過ぎないで、ゆつくりした氣持で寫すのがいゝのである。

繪としての寫眞を作ることに對しては、寫眞家の方が詳しいのであるから、科學者の著者が彼是云ふのは釋迦に説法であるが、自分がやつて居る方法は次の二通りある。

〔その一〕

餘り逃げ易くない昆蟲に對して行ふ方法で、ゆつくりピントを合せ乍ら昆蟲の位置とバックとの均合に依つて適當な位置を決定する。

〔その二〕

飛翔中のもの、又は逃げ易いものは瞬間的にピントを合せて兎に角寫してしまつて引伸す際に必要な部分を枠で圍んで不要の處を隠してしまふのである。

繪としての生態寫眞を作るには、餘りに周圍にピントの合ひ過ぎるレンズではいけない。多くの昆蟲には極めて巧妙な保護色がある爲に、どこに蟲が居るのか判らなくなつてしまふのである。それであるから、成るべく近づいて昆蟲にピントを合せ、その周圍をぼかす様にするのである。それから更に重要な事は、斯くして作つた寫眞を引伸すことであつて、少くとも四つ切位にはしたいものである。生態寫眞はアルバ

ムに貼つて見る寫眞ではなくて、掲げて少し離れて眺めてこそ眞の味があるのである。それであるから、前述の如き印畫でなければ眺める寫眞にはならないのである。

第三章 生態寫眞用のカメラ

生態寫眞に適するカメラはグラフィックス (R. B. Auto Graflex) の手札型が最良と信ずる。著者は色々のカメラを比較研究して見たが、他の種類はいざ知らず、昆蟲に関する限り此のカメラを推賞するものである。

グラフィックスは一見レフレックスに似て居り、上方にピントガラスを有し、レンズを通過した光線は鏡に反射してピントガラスに像を映すのであるから、乾板に映る像と全く同一の場面を見ることが出来るのである。シャッターを切る時は反射鏡が上つて感光する仕掛けである。

又此のカメラは蛇腹が長く伸びるから、相當接近することが出来るし、實物以上に擴大も出来る。シャッターは $1/10$ から $1/1000$ までであるが、通常 $1/30$ から $1/100$ までの間を適當に用ひれば充分である。

レフレックスを用ひる場合には補助レンズを用ひて、接近し得る様にしなければならない。操作はグラフィックスと變りない。

最近流行して居る二つレンズのカメラでも補助レンズに依

つて充分役立たすことが出来るが、小さくしかうつらないので餘程堅く種を撮つて置かないことには引伸しが綺麗に出来ないことになる。

ライカは生態寫眞に向くと云つて居る人もあるが、私は未だ試みたことはないし、全紙に伸した昆蟲の印畫を見た時には餘り感心した出来ばえではなかつた——尤もその他に立派な作品を見て居ないので云々する資格は無いが——兎に角自分につては \times である。

組立カメラは餘り活動性でない昆蟲に對しては有効であるが、ピントを合せて取枠を挿し込み、いざシャッターを切らうとすると本尊が居なくなつたりする事がよくある。

組立カメラで花に来る昆蟲を寫すのには、豫めその花にピントを合せて置いて、飛んで來た瞬間にシャッターを切ればいゝのである。

グラフィックスは舊式な半ば骨董的なカメラであるだけに手に入れることは難しいかも知れないから、有り合せの機械に手を加へて生態寫眞を楽しんで頂きたい。その方が却つて面白味が深いこと \times 信ずる。

第四章 乾板とフィルター

乾板は整色性の強いものならばどれでもいゝが、成るべくスピードの早いものを選ぶ方がいゝ。昆虫の種類に依てつは、非常に斑紋の複雑なものが多いから、その感じを出すにはどうしてもこれに適する乾板に依らねばならないのである。著者の経験に依ればパングロマティックはフィルターを用ひなければ十分に調子を發揮することが出来ず、フィルター（三倍位のもの）を使へば暗くなり過ぎるし、それにしても緑色の調子が面白く出ない缺點がある。

それに反してアグファのイゾクローム (Agfa Isochrom) はフィルター無しで十分に色彩の調子が出るので、自分はこれを最良として愛用して居る。暗室ランプも赤で差支へないから操作も極めて便利である。此の乾板は餘り使はれて居ない様であるが、昆虫生態寫真に限らず色に對しては最良であることを心得て頂きたい。

乾板とフィルムパックとどちらがいゝかと云へば、それは乾板である。必要に應じて現像が出来るとし、値段は約半額であるが、旅行用としては何と云つてもパックである。

第五章 撮影上の注意

昆虫は大體に於て驚き易い動物であるから、十分に注意して、覺られない様に近づかなければならない。衣服の色等も大いに關係があり、眞白い夏服は絶對禁物である。最初の間はどんな場面でも差支へないが、追々に意味のある場面を選ぶ様心掛けるが良い。眞の生態寫真を得ようとして凝りすぎると、一日歩いても思ふ様な場面に出會はない事がよくあるが、こんなに迄せずとも良からう。

先づ自宅の周圍から、そして段々遠方へ歩を移すがいゝ。最初から珍しい場面のみをねらはうとして苦心することは無駄な話で、何の氣なしに撮つたものが非常に價值のある寫真であつたりすることもあるから、成るべく廣い範圍に場面を求めなければならぬのである。昆虫は全動物の約六割を占めて居るだけあつて、棲息して居る範圍も極めて廣いのである。家の中、臺所、縁の下、一坪の庭にも夫々特殊な昆虫が棲んで居る。石の下、一鉢の植木、さてはゴミ捨場も亦違つた昆虫の棲家なのである。

花壇を訪れる胡蝶の華かなる生活があるかと思ふと、ゴミ

の中だけを樂園と心得て居る變り者もあり、甚だしきは惡臭鼻持ならぬ動物の死骸を無上の御馳走と賞味して居る御話にならない種類もある。そればかりではない。草原、森林、小川、池、路傍、畑、高山等に、有りと有らゆる場所には其處を天地として無数の昆蟲が生を楽しんで居るのである。

全世界に日本程昆蟲の豊富な處は無い。従つて生態寫眞研究家にとつては眞に寶庫とも稱すべきである。

第六章 昆蟲の世界

一坪の空地、一望千里の曠野、たとへ人蹟絶えた深山奥地と雖も昆蟲の棲息しない處は一としてない。

〔花〕 花と蟲とは切つても切れぬ縁の絲につながれて居るだけあつて、蜂、蝶、虻、蛾等派手な装をした面々が入れ代り立ち代り訪れて來る。一つの花に五十、六十と云ふ程多くの種類の昆蟲を宿すものさへある。色の美しい花には華美な蝶が來り、餘りぱつとしない栗の花にはカミキリ、コガネムシ等の甲蟲が多い。

蝶の多く來る花には百合、クサギ等ある。クサギの花には特にアゲハテフの類が多數に飛んで來るものである。カラタチの生垣には、アゲハテフがよく集つて來るものであるが、これは産卵の爲であつて、幼蟲、蛹等もともに見ることが出来る。

春から冬にかけて花の移り代りに従つて、訪れる昆蟲にも變りがある。初冬を彩る山茶花、茶、八手等には花虻、蠅等が豊富に見られやう。

〔樹木〕 樹木を住家とするものゝ代表者は蟬である。夕方

土中から出でて夜半に皮を脱ぐ。此の時の光景は極めて興味深い寫眞を得られるが、撮影には寫眞電球を用ひなければならぬ。

蟬には種類が多く、性質もまちまちである。或るものは朝から晩まで同じ樹に鳴いて居るかと思ふと、鳴き終れば忽ち遠方へ飛んでしまふものもある。

クハガタムシ、カプトムシ等も樹木に見られるものであつて、是等はクヌギや柳の幹から出る液に集るものである。

〔草原〕 草原には様々な昆虫が多い。バッタ、蝶、コホロギ等はその代表的のものであらう。キリギリス等の鳴蟲も夏の日照にもめげずギイ、ギイと鳴き續けて居る。小さな蟲にはテナウムシやカメムシが多い。

〔水邊〕 水邊には蜻蛉が多い。眞紅の體のシャウジャウトンボや紺色に翅を輝かせて居るテフトンボ等或は水面をスレスレに飛び交ひ、或は蘆の葉先に止つて陽光を受けて居る。

流れには眞黒な翅、緑色の體をしたアラハダトンボ、美しい赤褐色の翅を水面に映して憩つて居るカハトンボ等の美しい姿が見られる。水面を滑走して居るアメンボやミヅスマシも面白い。

〔畑〕 黄金の菜畑は蝶、蜂等亂舞の巷である。芋畑には眞

黒な體に眼玉のやうな紋を連ねた芋蟲が無氣味な姿で棲んで居る。

畑には栽培してある作物に依つて違ふ種類の昆虫が居るものである。

〔山〕 山の昆虫は平地の昆虫と違つたものが多い。處變れば品變るとは昆虫に對して最も適切な言葉であらう。

それでは是から愈々實際に蟲の世界をおとづれることにしよう。

Plate 1 みんなんぜみ

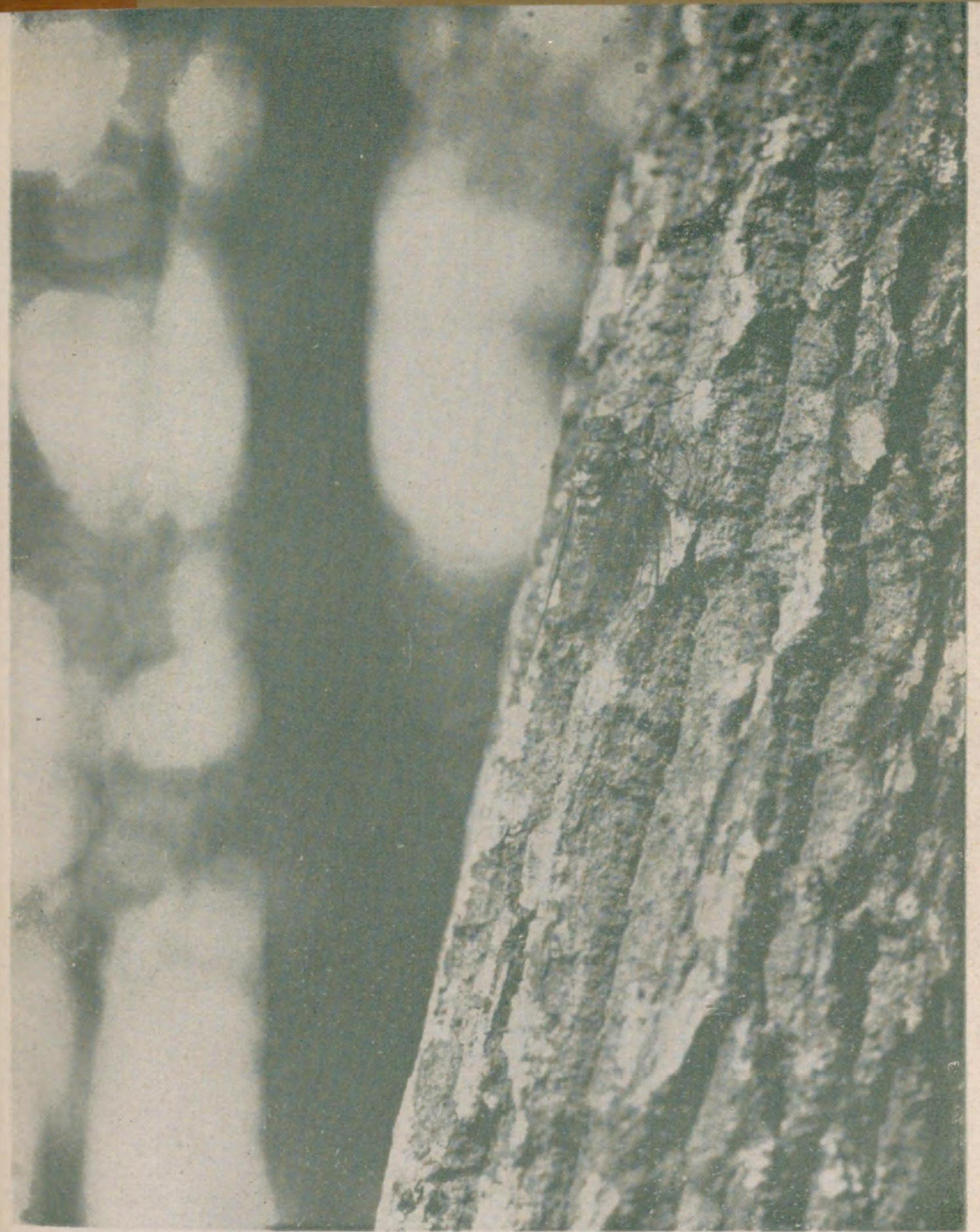
此の位眼の早い蟬は有るまい。抜き足差し足で近づいても結局は大急ぎで鳴くのを切り上げて飛んで行つてしまふ。

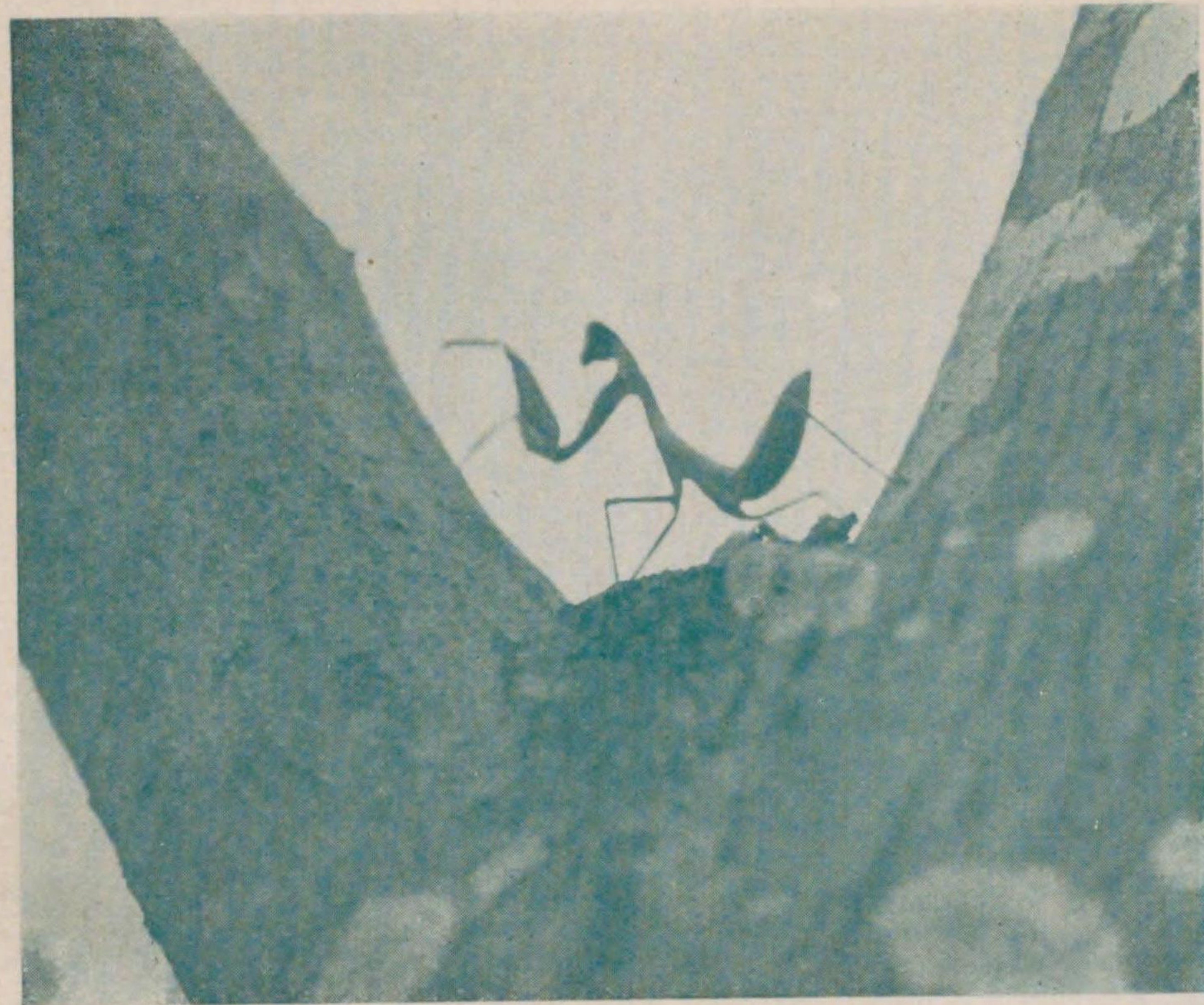
ミンミンゼミは東京附近では市内の庭園や社の杜等で澤山鳴いて居るが、其の他の地方では山へ行かなければその聲を聴くことが出来ない。ミヤマゼミ（深山蟬）とも呼ばれるのはその爲である。

撮影は正背面からするよりも、少しく斜に見る方がいゝ。それは、巧みな保護色の爲に蟬の存在が不明瞭になつてしまふからである。

2596年9月：石神井：Time 1/40

學名：*Oncotympana maculaticollis* Motschulsky





2

Plate 2 漫 步

やがて獲物を発見すれば、躊躇する處なく猛然と襲撃するのである。

斯うして腹を舉げて居るのはハラビロカマキリの仔蟲の特性である。

ハラビロカマキリの仔蟲には面白い性質がある。幅の広い腹を背中の方に折り曲げて居て、歩く時には體を前後に動揺しつつ前進するのである。親になると腹を持ち上げることも妙な歩き方もなくなる。

親は九月頃各處に見られる太短いカマキリで、一様に綠色、翅に一個の小さい白い橢圓形の紋がある。雄の翅は殆ど透明で體は細いが、雌の翅は不透明で腹は非常に幅広い。

2596年9月4日：石神井：Time 1/50

學名：*Hierodula patellifera* Serville

Plate 3 芙蓉の花 (その一)

蜜蜂が飛んで来た。そして止つた。まだ翅は動いて居る。
すつかり落ちて翅を閉ぢると蜜を吸ひ始める。

蜂の類は花に集るものが多い。中でも蜜蜂は人に飼はれる
有名な昆虫であつて、蜜を集めて居るのは働蜂である。元來
此の蜜は自分の子供を養ふ爲のものであるが、それを人間が
横取りしてしまふのである。

蜜蜂以外の蜂類にも蜜を自分の巣に持つて歸る種類がある
が、多くは自分の食物にするのである。蜂の色々な種類を撮
影しようと思へば、夏の頃カナムグラ (ビンボウカツラとも
云ふ) の花に待ち受けるがいゝ。アシナガバチ、ルリジガバ
チ、ハラナガツチバチ等々、少くとも十數種は一ヶ所で見ら
れる。

2593年9月：駒澤：Time 1/50

學名：*Apis indica japonica* Radoszkowski





 Plate 4 芙蓉の花 (その二)

芙蓉の花にはイチモンジセセリがよく集つて來るものである。この花の咲く頃は、丁度この蝶の發生期に當るからであらう。

イチモンジセセリは稻の害蟲である。幼蟲をハマグリムシと云ひ、稻の葉を食つて大きくなる。秋の頃此の蝶が大發生をして、何十萬と云ふ大群が同じ方向へ飛んで行つたことが屢々報告されて居る。普通に見られるセセリテフには此の他にハナセセリ、ホソバセセリ等あり、前者は翅が少しく圓味を帶び、後翅の白點が一行になつて居ない。後者は名の如く翅の幅狭く、裏面が黄褐色を呈して居る。是等は何れも同じ頃に發生するから、秋の花壇へ行けば必ず見られやう。

2593年9月：駒澤：Time 1/50

學名：*Parnara guttata* Bremer

Plate 5 ぬけがら

脱ぎ捨てられた蟬の衣。吹く秋風にからからと鳴る。

蟬の脱け殻には一種の雅趣がある。永い間の土中生活をした名残りの古衣を脱ぎ捨てて、羽衣を得た蟬は梢に歌ふ。秋の暮蟬の音の全く絶えた林の枯枝に脱け殻を見る時、一抹の淋しさを感じずには居られない。やがては小蜘蛛の冬籠りの宿となるのであらう。



5

2596年9月4日：石神井：Time 1/30

學名：*Oncotympana maculaticollis* Motschulsky

(ミンミンゼミ)



Plate 6 初 冬

初冬となれば流石に蟲の姿が淋しくなる。茶畑には今を盛りと眞白な花を開いて居るが、訪れるものにはキイロスズメバチ、クロスズメバチ、ハナアブ、ヒラタアブ等で、華かな蝶は甚だ少い。寫眞は奥の方へ潜り込んで花粉を食つて居るコアヲハナムグリ。

十一月を過ぎるとめつきり昆蟲の姿が減つてしまふ。

一霜毎に或るものは死に、或るものは暖かい隠れ家を求めて姿を潜めてしまふのである。それでも遅れ咲きの菊や薊或は寒さをものともせず咲き誇る山茶花、ハツ手等には、弱々しげなヒラタアブやハナアブの類が訪れて来る。斯くして翌春梅の頃まで我々はカメラと別れねばならない。

2593年10月：駒澤：Time 1/30

學名：*Oxycetonia jucunda* Faldermann

Plate 7 貝細工とかめむし

カヒザイクの花にはよく色々な蟲がやつて来る。秋の或る日、花壇に来る蟲を眺めて居ると、下の方から一匹のプチヒゲカメムシが這ひ上つて来た。遠からず訪れる冬の日の準備の爲に、花のある間に斯うして充分食物を攝つて居るのだ。

カメムシは臭いので有名である。うつかりつかまうものならば、いくら手を洗つても落ちるものではない。此の類は色々な植物に棲んで養液を吸収し、大害を興へるものが多い。菜畑やダイコンに居る黒地に赤い紋のあるナガメ、豆につく細長い褐色のホソヘリカメムシ、總體緑色のアヲクサカメムシ等は最も普通のものである。

2595年9月：石神井：Time 1/35

學名：*Dolycoris baccarum* Linnaeus





 Plate 8 鳴きつゝあるおほささきり

稲田にすだくオホササキリ。シャ シャ シャ シャと弱い音ながら秋の調べを奏でる可憐な蟲である。長い觸角を左右交互に前方へ打ち振り乍ら、寫されたのも氣附かずに鳴き續けて居る。

同じキリギリス科の昆蟲でも、ササキリの類は優しい可憐な昆蟲である。秋も深くなつて稻穂が頭を垂れる頃、水を落した稲田や畦路で聞く弱々しげな聲は、秋景色にしつくりと融け合つて居るやうである。

薄暗い林の下草には、背面黒色で肢や體下の綠色をしたササキリと云ふのが居る。體に數倍した觸角を動かし乍らカシャカシャカシャと低い聲で鳴く。

2593年9月19日：浮間ヶ原：Time 1/50

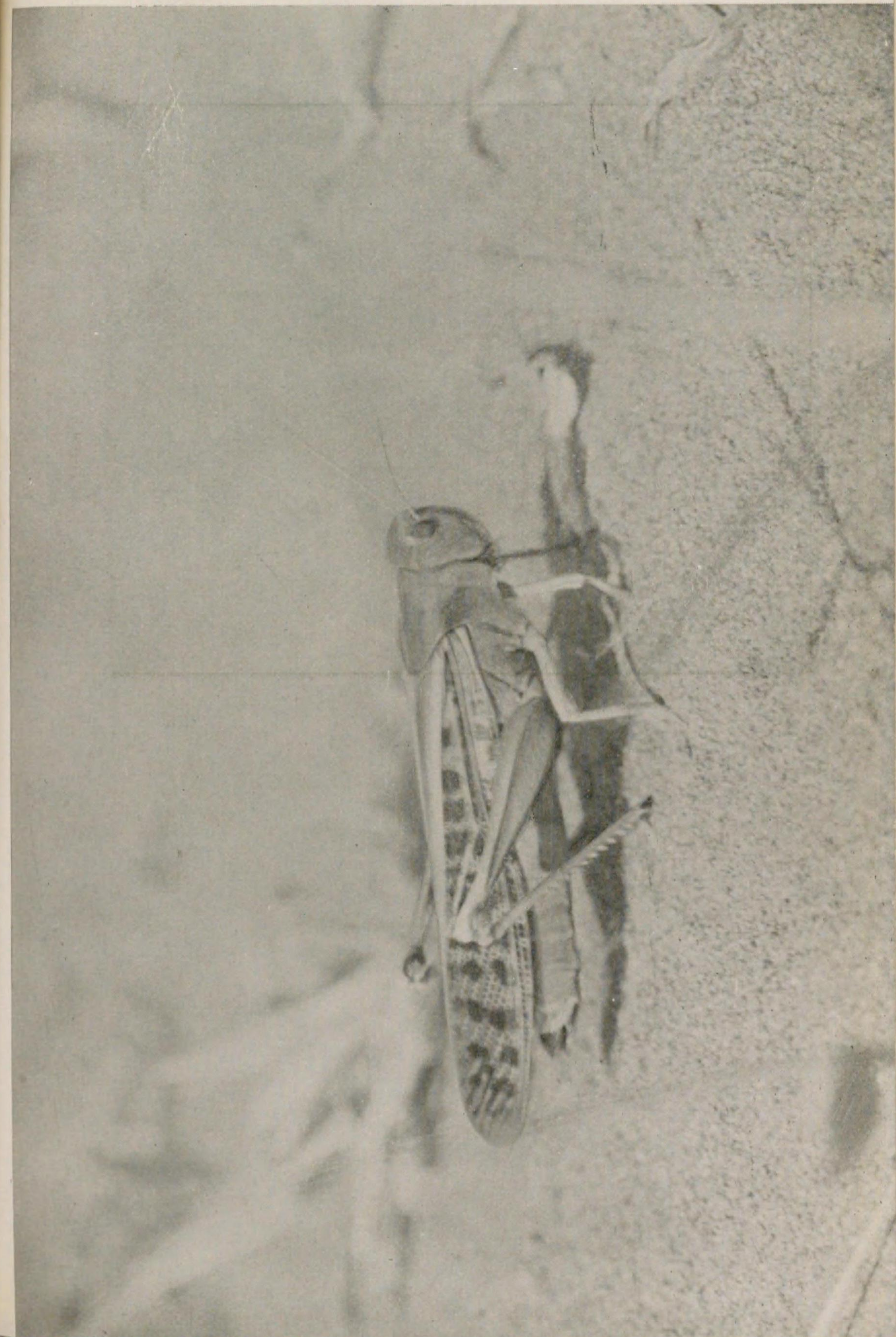
學名：*Conocephalus gladiatum* Redtenbacher

Plate 9 飛翔十秒前

大地を蹴つて將に飛び立たんとするトノサマバッタ。突き出した觸角, 肢の形, これは飛ばんとする際の眞の姿である。飛び揚つてはハタハタと羽搏きして降りる。秋の草原は賑かである。トノサマバッタ, クルマバッタ, その他何種かのバッタは我が物顔に廣野を濶歩し, それを追ふ子供の群も賑はしい。

2593年9月19日: 浮間ヶ原: Time 1/100

學名: *Locusta migratoria* Linnaeus





10

Plate 10 揚羽蝶

アゲハテフはキアゲハの様にじつと翅を擴げて止らない。
いつも落附かないで翅を動かし乍ら蜜を吸つて居る。

アゲハテフはカラタチの生垣によく來るものである。それはカラタチが幼蟲の食物だからで、注意して探せば幼蟲や蛹をいくらかも見つけられる。幼蟲は背中を突くと臭い肉色の角を出すので有名である。

アゲハテフの類は種類が多いが、普通庭等に飛んで來るものに黒くて後翅に赤紋あるクロアゲハ、金綠色に光るカラスアゲハ、水色の紋のあるアラスジアゲハ等がある。何れも落ち着いて止ることなく、絶えず翅を動かしながら蜜を吸つて居る。

2595年9月：石神井：Time 1/50

學名：*Papilio xuthus* Linnaeus

Plate 11 油 蟬

蟬の中でこの種類は最も普通なだけに、色々なポーズを得られる。これは油蟬の雌が、自分と同じ様な色をして居る赤松の幹に静かに止つて居る處。

夏の日盛りにジリジリ鳴かれると、一層暑さに輪をかけられた感がする。さうかと云つて夏の日に蟬が鳴かないと夏らしい氣持がしない。矢張り蟬は夏に無くてならない景物であらう。

2594年9月：駒澤：Time 1/35

學名：*Graptopsaltria nigrofuscata* Motschulsky





Plate 12 いなご (その一)

川岸の菰の葉にコバネイナゴが澤山止つて居る。下方の二匹は交尾中のもの。又このマコモの葉は絲で閉ぢられて居るが、それは螟蟲の或る種の仕業で、葉を捲いた中で食つて居るのである。

イナゴは稻子の意味であるが、稻にばかり居るとは限らない。稻の仲間の禾本科植物ならば何でも食ふのである。そればかりではなく、燈心草科の葦をも盛に食ふ。

イナゴは秋の景物である。畦路を歩けばバラバラと左右の稻に飛び移つて行く様は風情がある。

2593年9月19日：浮間ヶ原：Time 1/50

學名：*Oxya vicina* Br. v. Watt.

Plate 13 いなご (その二)

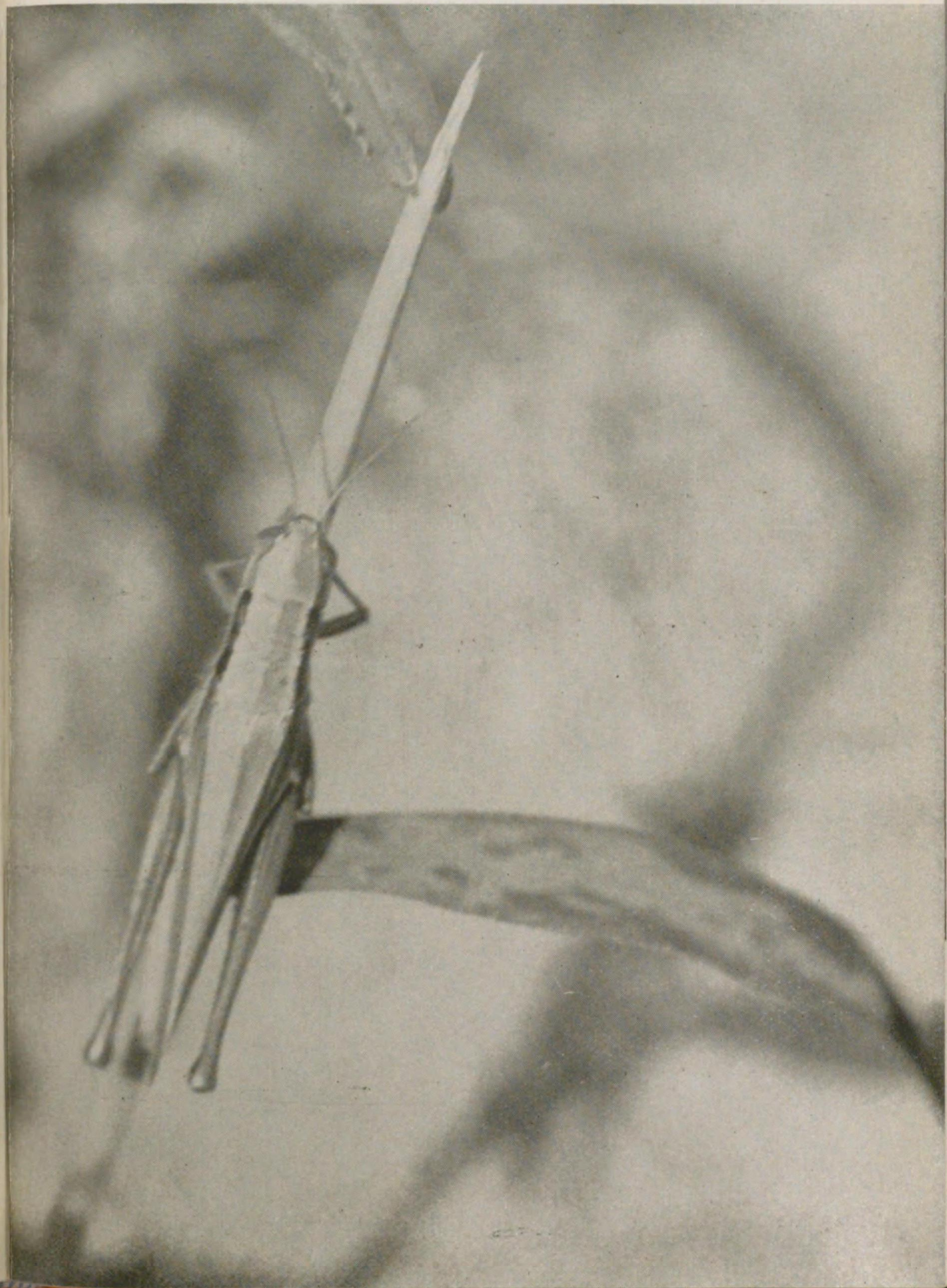
雑草に止つて居るコバネイナゴ。止つて居る時の肢の状態がはつきり判るであらう。ちゞめて後肢を急にはちくことに依つて急激に逃げる事が出来るのである。常にいつでも逃げられる準備をして居るものとも考へられる。

一口にイナゴと云つても翅の短かいコバネイナゴと翅の長いハネナガイナゴの二種類がある。両方共同様の場所に棲んで居るが、後者の方が翅が長いだけによく飛ぶ。

イナゴは昔から我が國で全国的に食用に供される昆蟲であつて、今日の研究に依れば頗る營養價が高いと云ふことである。コバネでもハネナガでもその點變りがないと思ふ。

2593年9月19日：浮間ヶ原：Time 1/50

學名：*Oxya vicina* Br. v. Watt.





14

Plate 14 うちはやんま

ウチハヤンマは畑に立てゝある棒の先とか、池の上に突き出た枯枝の先等に好んで止るものである。東京の子供達は尾の先の圓い附屬物に依つて「おくるま」と呼んで珍重して居る。然し中々すばやいのでつかまへることは容易でない。尾の先の附屬物は雌雄で大きさが違つて居る。雄は大きく、雌は小さい。

ヤンマの類には止り方に二種あつて、ウチハヤンマやサナヘトンボの類は水平に止り、ギンヤンマ、オニヤンマ等は體を垂直にぶら下げるのである。

2595年7月：石神井：Time 1/100

學名：*Ictinogomphus clavatus* Fabricius

足音に驚いて孔から出て来たエンマコホロギ。闘争の経験者であらうか、左の後肢が無い。鳴く蟲の仲間入りをして居るエンマコホロギも、野外に在つては畑荒しの大害蟲である。八月下旬から十一月半まで、郊外に多い。

更にその先の方からミツカドコホロギも出て来た。折角孔を作つて隠れて居るのであるから、足音を聞いてもじつとして居れば見つけられずに済むものを、チヨコチヨコと顔を出す處に愛嬌がある。

エンマコホロギはいゝ聲で鳴くので町で賣られるが、それは總て人工養殖に依るものであつて、六月末には縁日にお目見えして居る。此の昆蟲は普通の蟲籠では噛み破つてしまふので、金網張りの特別な籠が出来て居る。

内地では秋の發生であるが、臺灣では四月頃からもう鳴聲が聽かれる。エンマコホロギを飼ふ時に、決して何匹も一緒に入れて置いてはいけない、共食ひをするからである。

2596年9月4日：石神井：Time 1/40

學名：*Gryllus mitratus* Burmeister (エンマコホロギ)

Loxoblemmus doenitzi Stein (ミツカドコホロギ)





16

Plate 16 幹に止るぎんやんま

ギンヤンマが蟬の様に樹の幹に止つて居る光景を始めて見た。何の目的で斯うして居るのか判らない。

此の様な例は眞の生態ではない。元來此の蜻蛉は木の枝等にぶら下つて止るのが正式なのであるから、幹に止るとすれば異例なのである。然し斯うした異例は學術上極めて貴重な資料となるのであるから、見逃してはならないのである。

2596年9月4日：石神井：Time 1/30

學名：*Anax parthenope* Selys

Plate 17 翅を休めて

美しい翅をすつかり擴げて何の屈托もなげに止つて居るキアゲハ。昆虫には休息もある。

キアゲハは他のアゲハ類の様に翅を絶えず動かすことをせず、翅を擴げたまゝで静止する。アゲハテフはカラタチに多いが、キアゲハはニンジン畑に澤山飛んで来る。幼蟲は綠色に黒い横條の澤山ある美しい色で装をして居り、ニンジン、パセリ、ミツバ等に多い。

2596年9月4日：石神井：Time 1/30

學名：*Papilio machaon hypocrates* Felder





Plate 18 待 機

シホヤアブは小さき隼である。附近を飛ぶ獲物を見つけると、猛然と飛びかゝつてこれを餌食とする。八方を睨んで居る大きな眼、鋭いくちばしを見よ。

楽しげに舞ふ胡蝶も、つばさ輕げに飛ぶ蜻蛉もうつかりして居ると、横合から此の様なギャングが飛び出して命を奪つてしまふのである。小さき蟲の世界は實に生存競争の縮圖である。

2593年9月：駒澤：Time 1/50

學名：*Promachus yesonicus* Bigot

Plate 19 るりたてはの羽化

蛹から脱けたルリタテハがすっかり伸び切つた水々しい翅を伸ばして居る處である。すっかり翅が伸びても、まだ軟かで全く飛ぶ力は無い。やがて翅を押し伸ばした血液が身分の體の中へ戻つて來て、空氣と日光の力で翅がすっかり固まると安全な處へ飛んで行くのである。

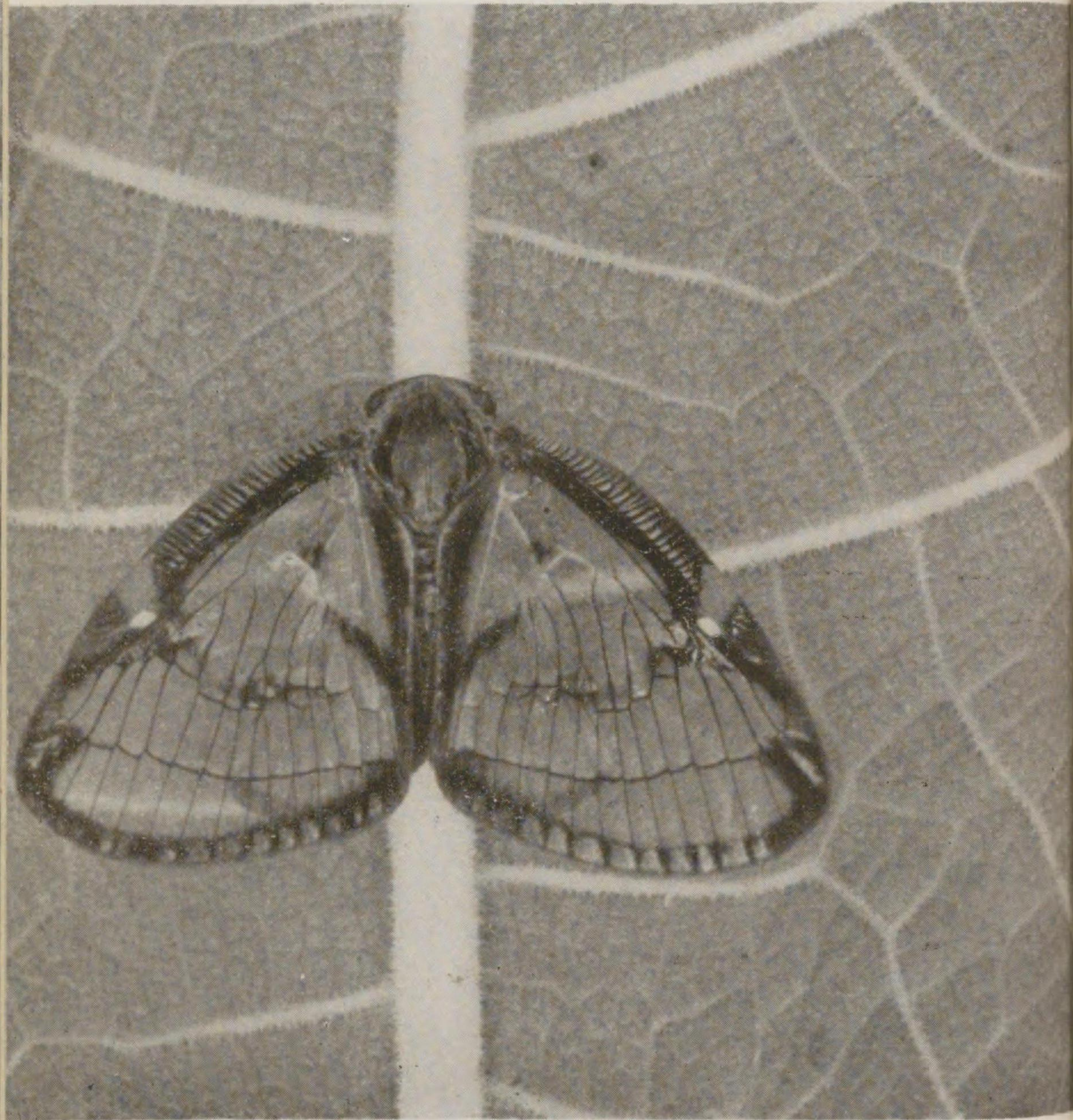
粉一つ落ちて居ない脱け立ての蝶の美しさ！

2593年5月：玉川溝の口附近：Time 1/50

學名：*Vanessa canace nojaponica* Siebold



Plate 20 葉 裏



イチヂクの葉裏に静かに止つて居るスケバハゴロモ。そつと近づくと翅を水平に起して、今にも飛び出さうとする様な様子をする。

此の蟲は一寸見ると蛾の様であるが、實はウンカの一種であつて、蟬等と親類である。夏の終り頃カナムグラ、クズ等に多い。これに似て全體暗褐色、翅に透明紋のあるのをベツカフハゴロモと云ふ。茶、葛等に見られるが、個體數は少い。又全體青色のアヲバハゴロモも似た様な仲間で、茶其の他種々の灌木に多い。

2593年9月：駒澤：Time 3秒：絞り 25

學名：*Euricania fascialis* Walker

Plate 21 田園スケッチ

早春ダイコンの花の咲く頃は一年中で一番懐しい時節ではないだろうか。長い冬の日から解放されて、田園を散策すれば、既に油菜やダイコンは真盛りで、黄に白に浅緑の大地を染めて居る。

花のある處には必ず蟲が居る。夫等の花には蝶、虻、蜂等の喜ばしげな姿が織る如く蜜を求めて居るのである。寫眞はノラハナアブ(シマハナアブ)がダイコンの花の蜜を求めて居る處。これは著者の處女作で懐しい寫眞である。

2593年4月：駒澤：Time 1/50

學名：*Eristalis cerealis* Fabricius



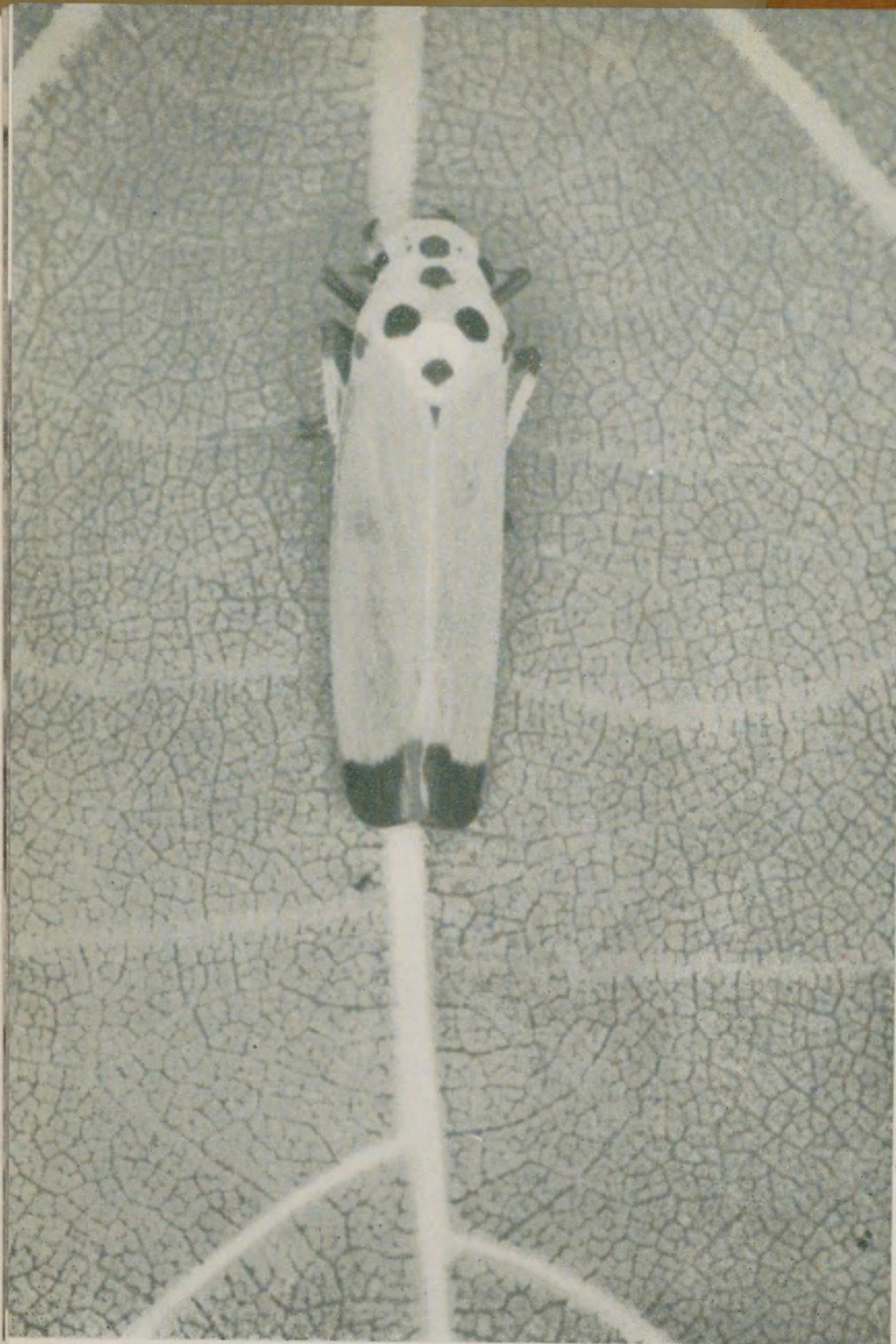


Plate 22 つまぐるおほよこばひ

その邊の雑草に澤山居る昆蟲である。手を出せば横に這つて葉の向ふ側に隠れてしまふが、敵はないと思ふと始めて飛んで行く。

子供達はヨコバヒの事をハトと云ふ。その姿が鳩を思はせるからであらう。ツマグロオホヨコバヒは日本内地のヨコバヒ中では最も大きい種類で、體長13mm位ある。一見蟬に似た黄綠色の可愛い昆蟲である。親の姿で冬を越すので、暖かい日等には雑草の間から飛び出して來ることがある。

仔蟲は淡黄色で腹端が尖り、舟の様な形をして居る。植木等の養液を吸はれると、害があるから、注意しなければならない。

2593年9月：駒澤：Time 5秒：絞り 25

學名：*Tettigoniella ferruginea* var. *apicalis* Walker

Plate 23 青松蟲

聲のいゝものは姿が醜いと云ふ諺があるが、この蟲は素晴らしい美聲の持主であるに拘はらず、姿は緑色で美しい。夏の終頃から庭園、街路樹等にリーリーの聲を聽かれるが、聲はすれども姿は見えすである。

アマツムシは元來が舶來の昆蟲で、約三十年位前に渡來したのであるが、國籍は判つて居なかつた。それが最近になつて支那の上海附近が原産地であることが判明した。

夜開け放した窓からよく飛び込んで來るもので、これを捉へて飼ふには、他の鳴蟲の様に胡瓜や茄子は駄目で、桃、梅、櫻等の葉を壘に挿して入れて置けばいゝのである。卵は木の枝に産みつけられる。

寫眞はクスギの葉に止つて居る青松蟲の雌。裏面に白紙を置いて寫す。

2593年9月：駒澤：Time 1/40

學名：*Madasumma hibinonis* Matsumura





 Plate 24 花壇の賑ひ (その一)

咲き亂れた花を訪れて、後から後から色々な昆虫が引切り無しにやつて来る。

晴れた一日を花壇に過せば昆虫の千姿萬態何十枚でも收穫があらう。寫眞はカヒザイクとヒメアカタテハ。

春から秋までその時季時季の花を訪れる昆虫群には變遷がある。春は冬眠から醒めた蜜蜂類の蜜を漁るに忙はしく、越冬して色褪せ翅破れたる胡蝶の弱々しげなるが入り交り、麗かな陽光のもとに花から花を訪れる様は賑しき限りである。

樹々の緑深まりて花の種類も豊富に、鬼百合、山百合等の咲く處には大形の蝶類飛來して互に妍を競ひ、朝まだきに開く朝顔には早起のトラマルハナバチの羽音高く、夕暗に浮ぶ月見草には様々のスズメガが入り換り立換り飛んで来る。

2595年9月：石神井：Time 1/50

學名：*Pyrameis cardui japonica* Stichel

Plate 25 花壇の賑ひ (その二)

大きな蝶はキアゲハ (*Papilio machaon* Linn.) その向ふにヒメアカタテハが居る。又左方の花にはイチモンジセセリ (*Parnara guttata* Bremer) が見られる。

秋の花壇の長閑な一景。

草葉におく露繁くなる頃、花壇の芙蓉、萩等を集る昆虫にはキテフ、ヒメアカタテハ、ハラナガツチバチ等あり、晩秋に遅れ咲く黄菊にはヒラタアブ、小さき蜂等淋しげに飛んで来る。

初冬の山茶花、茶、ハツ手、或は春に魁てほゝえむ梅の花には、花虻の類が寸餘の霜柱にもめげず集つて花粉媒助の勞を惜まない。

2595年9月：石神井：Time 1/50



Plate 26 止る瞬間

アキアカネが棒の先に正に止らうとする處。飛んで居る時には肢は體に引き寄せられて居る。又飛翔中は腹の先が上下に振動して居るのも明瞭に見られよう。

昆蟲が飛んで居る時の姿勢は種類に依つて一様でない。蜻蛉の類は體を水平にして肢を引よせて居るが、他の昆蟲は大概體を傾斜(腹部を下げて)させて居る。アツナガバチは肢をぶら下げて飛び、カミキリは觸角を前方に突き出し、肢を全部左右に擴げて居る。カブトムシも同様であるが、前肢と中肢とは殆ど接近した位置である。

2593年10月3日：駒澤：Time 1/100

學名：*Sympetrum frequense* Selys

Plate 27 草 原

夏の終りから秋にかけては、草原にバツタの種類が多く発生する。彼等は主に禾本科植物を食ふからである。バツタの中には飛翔性のトノサマバツタやクルマバツタ或はシャウリヤウバツタ等から、餘り飛ばないシャウリヤウバツタモドキの様なものもある。飛ばないものは色彩が植物に似て居るので、発見は困難である。

寫眞はシャウリヤウバツタモドキ（舊名キチキチバツタ）がチガヤの葉に止つて居る處である。

2593年9月19日：浮間ヶ原：Time 1/50

學名：*Gelastorhinus bicolor* De Haan

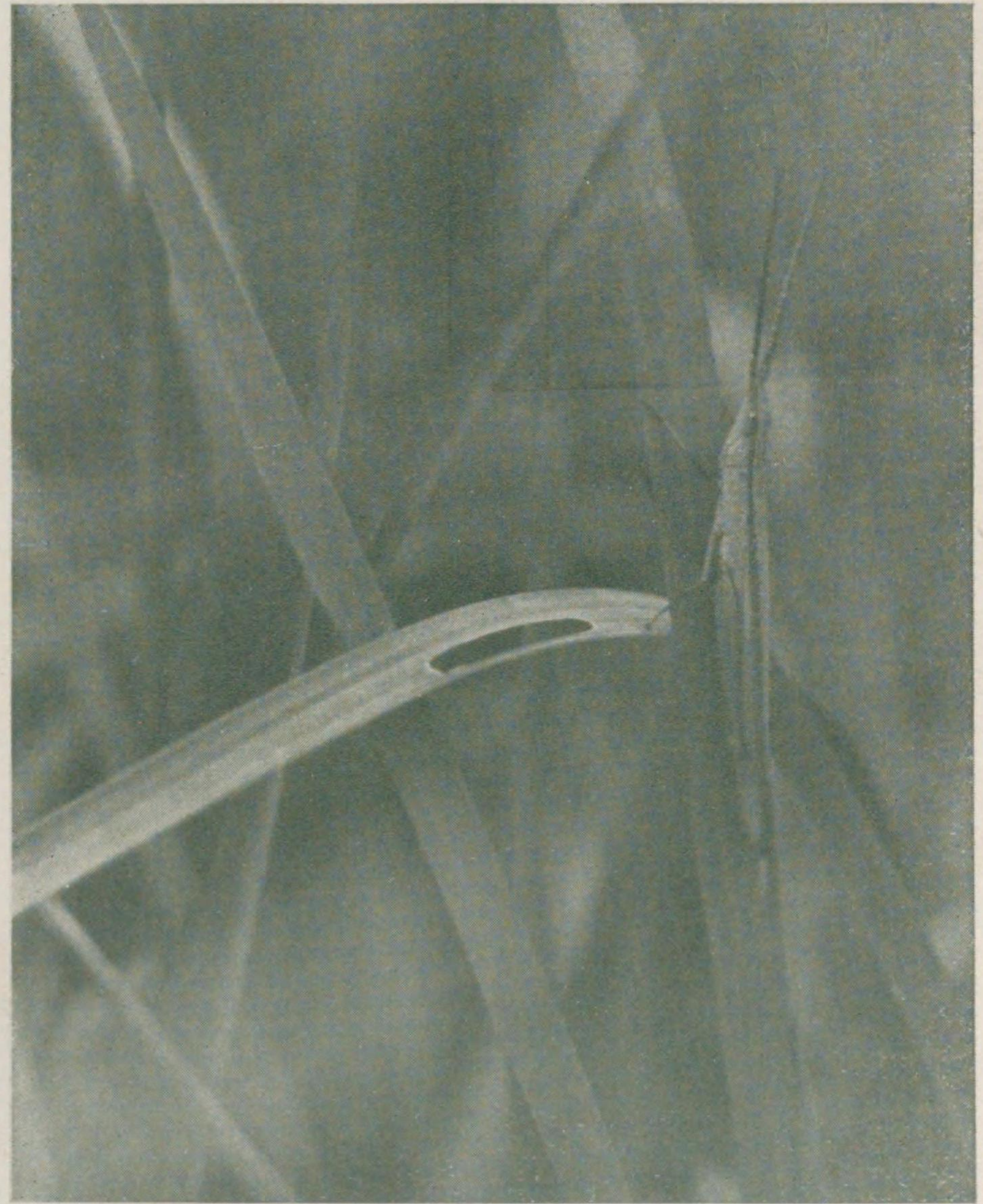




 Plate 28 鳴く 蟬

蟬は我々の子供の頃の最もいゝ遊び相手であつた。蟲籠を片手に長いモチ竿を擔いで公園の森をさまよつた思ひ出が今でもはつきりと浮んで来る。大概の人はさうでないだらうか。

その頃最も値打のあつた種類はミンミンで、ヒグラシは容易に手に入らない稀品であつた。實際は澤山居るのだけれども、鳴き出す頃まで遊んで居ると叱られるので捕れないことになるのである。一番駄物はアブラで、これは誰も喜ばない。ニイニイゼミの方はジイジイと稱して相當珍重される。それは他のものに魁て鳴き出す爲であつて、走りである處が喜ばれるのである。それに反してオーシイ（ツクツクボウシ）の方は、散々蟬捕りに飽いた頃現はれるし、またすばしこいので餘り顧みられない。尤もその時期には夏休みも終つて居るので餘り感興を引かれなくなるのであらう。

2596年8月15日：吾野溪谷：Time 1/50

學名：*Graptopsaltria nigrofuscata* Motschulsky

Plate 29 梅雨明け

うつたうしい梅雨が明ける頃になると、高い梢に＝イ＝イゼミの鳴き聲が聞える。細い透る様な聲は決して喧しいと云った様な感じを起させない。

奥州立石寺で詠んだ芭蕉の句“静かさや岩にしみ入る蟬の聲”は此の蟬の事で、唯一人山奥を旅行して老樹の梢から流れて来る＝イ＝イゼミの聲を聴く時、周囲の静寂と調和してしみじみと静けさが身に浸むであらう。

餘りに樹皮に似た色彩である爲その存在が明かでないかも知れないが、寫眞の左側の幹に止つて居るのである。

2593年7月：駒澤：Time 1/50

學名：*Platypleura kaempferi* Fabricius





 Plate 30 おんぶばつた

蚤の夫婦と云ふが、オンブバツタの夫婦も夫れに勝るとも劣らぬコントラストである。赤ん坊然と背中におんぶして居るのが彼女のハズであつて、此の大豆の葉が食ひ荒されて居るのは御兩所の仕業である。

バツタの多くは草原に多いと云つたが、この種類は畑に多い。色々な作物の葉を食ひ荒すので、農家に取つては大害虫である。翅はあつても全く飛べないと云つてもいい位である。

2593年9月19日：浮間ヶ原：Time 1/50

學名：*Atractomorpha bedeli* Bolivar

Plate 31 樹を登る

ノコギリクハガタが櫟の幹を下から上へ這ひ登りつゝあるところ。肢の動き方に注意。六本の肢は此の様に交互に動きつゝ體を運ぶのである。

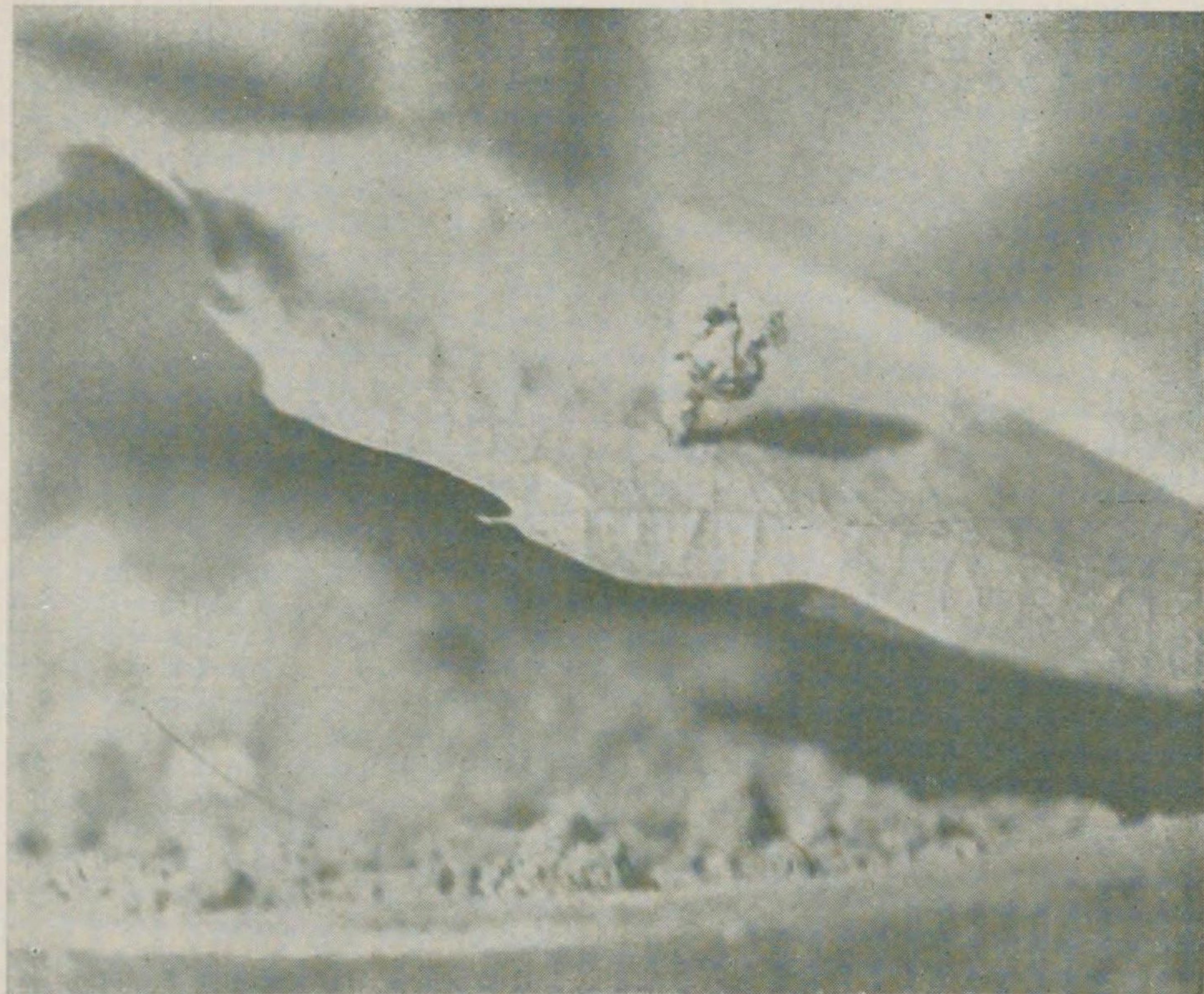
クハガタの類は子供のいゝ遊び相手である。夏の朝未だほの暗い間に櫟林へ行くと、幹から出る汁を吸ひに澤山集つて居るのが見られる。最も多いのはクハガタムシで、これは黒色、小形で平たく角もまつすぐである。もつと小形で翅に條の澤山あるスヂクハガタや、寫眞の様なノコギリクハガタも少くないが、山へ行くともつと大形で鹿の様な角を持ち、胸に瘤のあるミヤマクハガタが多い。

ノコギリクハガタを二匹持つて來て鬪はすと面白い。角を振つて相手を挟んだり倒したりする。

2593年6月：駒澤：Time 1/50

學名：*Psalidoremus inclinatus* Motschulsky





32

Plate 32 ぴすとるみのむし

ブローニングピストルそつくりの形をして居る。この蟲は蛾の一種の幼蟲で、ピストルの筒口から頭を出して逆立し乍ら木の葉を食つて居るのである。春先櫟の葉を注意すると見つけられるが、形が小さいから注意しないとわからない。

2593年5月：駒澤：Time 1/30

學名：*Coleophora* sp.

Plate 33 寄 生

大きなカシハマイマイの幼蟲が止つて居る。ふと見ると一匹のブランコヤドリバヘが幼蟲の周圍を這ひ廻つて居るのでどうするのかと思つて見て居ると、やがて長い産卵管を前の方に突き出して毛の間へ卵を産みつけ始めた。寫眞は盛に卵を産みつゝある處。

朝七時頃で未だ陽が當らず光線不足の爲、姿見を持つて來て反射光線で寫した。

此の幼蟲を持ち歸つて飼つて置いた處間もなく毛に産みつけられた卵から生れた蛆は、幼蟲の皮膚を食ひ破つて體内に侵入し、其處に新たなる生活が始まつた。即ち蛆は幼蟲の體内を食ひ始めたのである。數日たつと幼蟲は死んでしまつて見る影もなくなり、中から丸々と肥つた大きな蛆が澤山這ひ出して來た。これはそのまゝ土中にはいつて蛹になるのである。斯うして斃されて行く幼蟲の數は、決して少いものではない。

2593年7月：駒澤：Time 1/55

學名：*Tachina larvarum* Linnaeus





Plate 34 水 邊

イトトンボの色々な姿を見ようと思へば、植物の茂つた水邊に行かなければならない。交尾、産卵等は他の普通の蜻蛉とは餘程異つて居る。

此の寫眞は、グンバイイトトンボの尾つながりの一姿勢である。

水邊にはイトトンボが澤山居る。或は飛び、或は止り、小さき世界を楽しんで居るのである。イトトンボには、種類が多い。甚だ小形のものにはヒメイトトンボで、これには尾端が青、黄緑、赤等の色を呈するもの、體全體が赤いもの等變化多く、それより少しく大形なものにはイトトンボ、オホイトトンボ等あり、更に大形で腹部に白い區切りのあるはモノサシトンボ、總體黄色なキイトトンボ、又眞赤なアカイトトンボ等平地の池畔に見られる種類である。

2593年6月4日：井の頭：Time 1/50

學名：*Coperia marginipes* Rambur

Plate 35 くらばねつりあぶ

夏の日、カナムグラの花を訪れる定連の一匹。藍色に輝く黒い長い翅を持つた虻である。體は黒色、胸の周圍に黄褐毛があり、腹部に幅の廣い白帯を持つて居る。花の蜜に飽いたかして近くのトマトの葉に止つた處を……。



35

2593年8月：駒澤：Time 1/50

學名：*Hyperalonia tantalus* Fabricius





Plate 36 おほたまかひがらむし

春先、クヌギの枝に寄生する大形の介殻蟲である。淡黄褐色、暗褐紋あり、總體柔軟で、光澤がある。丁度蜘蛛の或る種の腹部の様な感じの面白い昆蟲である。

昆蟲と云へば六脚四翅を聯想するであらうが、何處が頭か解らない無脚のものもある。然しこれも卵から孵化した當時は立派な脚があつて自由に歩行したのであるが、一旦植物に吸着すると脚を失つてしまふのである。これは雌であつて、雄は立派な翅を持つて居る。

2593年5月：駒澤：Time 1/50

學名：*Kermes vestus* Kuwana

Plate 37 雑草の上

若緑一色に塗り潰された五月晴の日，雑草生ひ茂る叢からやがて，翅が伸びてすだくであらうヤブキリの仔蟲が這ひ上つて来て，陽光を體一杯に吸収して居る。但し此の仔蟲は雌であるから，親になつても鳴かない。

春の終り頃になると色々な昆蟲の幼蟲が大きく育つて間もなく親になりさうなのが澤山に見られる。幼蟲は幼蟲，親は親と生活状態が全く違ふものが少くないから，その様な點に注意を向けるのも興味が深い。



37

2594年5月：世田谷區等々力不動：Time 1/40

學名：*Tettigonia orientalis* Uvarov



38

Plate 38 みやまふきばつた

一寸山路にかゝるとその邊の葉上に、翅の短かいバツタが
澤山に見られる。これはミヤマフキバツタだ。

今しも桑の葉にとびついた雌のバツタを、逃げられない内
にカメラに……。

フキバツタは山の路傍にいつでも見かける種類である。フ
キを食ふのでフキバツタの名があるが、食物はフキばかりと
は限らない。ススキの様なものは食はないが、桑でもツハブ
キでも其の他潤葉の雑草ならば何でも食ふ様である。翅は甚
だ短かいが、中には全く無いものもある。従つて飛ぶことは
出来ない。

2596年8月15日：奥武蔵大藏平：Time 1/35

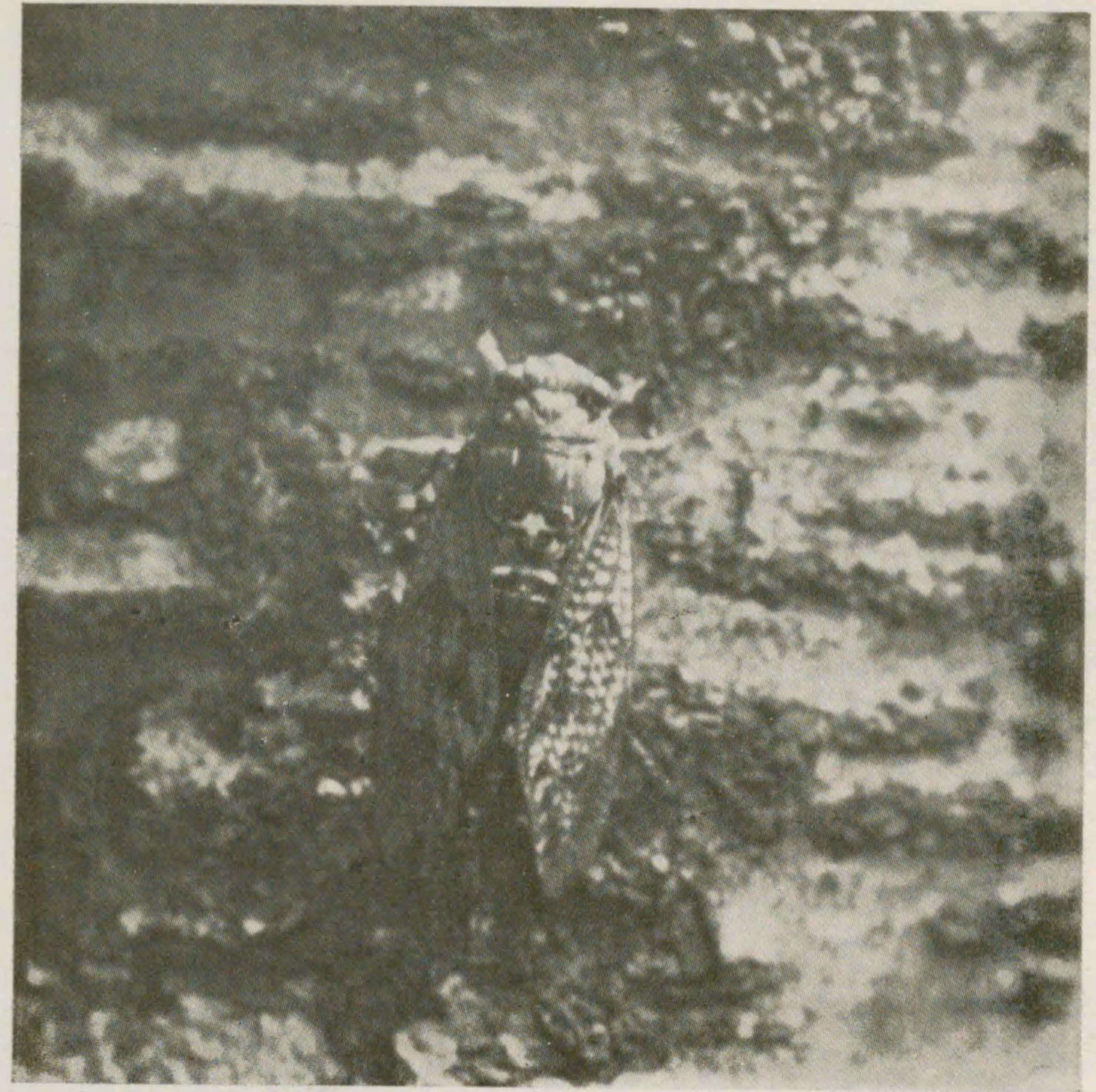
學名：*Podisma mikado* Bolivar

Plate 39 鳴く蟬

思ひ切つて體を浮かせ、翅を幾分擴げて懸命に聲を張り上げて居る姿。蟬は生きた樂器である。

—鳴きつゝあるアブラゼミ。

蟬の一生は唯歌つて死んで行くだけである。永い永い土中の生活、恐らくは十數年の暗黒生活をやつと了へて地上に現はれて來れば、其處には既に死が約束されて居るのである。土中時代の長い命に比べて、此の世の生命は甚だ短かいのである。一週間乃至は十日にして再び元の土へ、永久に歸らなければならぬ。それでも烈日のもとに何の屈托もなく、蟬は愉快げに歌ひ續けるのである。



2596年9月：石神井：Time 1/50

學名：*Graptopsaltria nigrofuscata* Motschulsky



 Plate 40 しりあげむし

ふと眼の前を飛んで来たシリアゲムシが草の上に止つた。
 シリアゲムシ——こんな蟲があるのかと思はれる程一般とは縁の遠い蟲である。此の様な種類のもは餘程昆蟲に注意でもしない限りは眼につかないかも知れない。

初夏の頃から、山際の林の中に多い昆蟲で、雄の腹端に鉗がついて居り、常にこれを持ち上げて居る姿に愛嬌がある。然し雌にはそれが無く、單に細く尖つて居るに過ぎない。

2593年7月24日：相模大山：Time 1/50

學名：*Panorpa japonica* Thunberg

Plate 41 しほやとんぼ

シホヤトンボは蜻蛉の内でも早く出る種類で、四月頃既に姿を見られる。路上、地上等の日當りのいゝ處によく止つて居るものである。

寫眞は石垣の上に止つて居る處。

此の蜻蛉に似たシホカラトンボはもつと大型で腹部の後半は黒く、コフキトンボは池の上に多く、體は細く翅は大きい。

蜻蛉の中には好んで地上に止るもの、棒の先に止るもの、樹上に止るもの、樹の枝にぶら下るもの等種類に依つて性質が異なるから、撮影に際してもそれ等を心得て置く必要がある。

2593年4月：駒澤：Tlme 1/50

學名：*Orthetrum japonicum* Uhler





42

Plate 42 紋白蝶

カナムグラには色々な昆虫が集つて来る。蝶、蜂、虻等。今しも一匹のモンシロテフが蜜を吸ひに止つた處。前翅は未だかすかに動いて居る。

モンシロテフは菜畑に多い。それは幼蟲が菜の類を食つて成長するからである。菜や大根の花にも澤山集つて来るが、夫等の花の無くなつた夏には他の色々な花に来るものである。

モンシロテフによく似て翅に黒い條のあるものをスヂグロテフと云ひ、一層小型で細い翅を持つたものにヒメシロテフと云ふのがある、これはどこにも居る種類ではない。四月末頃出る翅の先が橙色を呈するツマキテフは、割合に普通である。

2593年7月：駒澤：Time 1/50

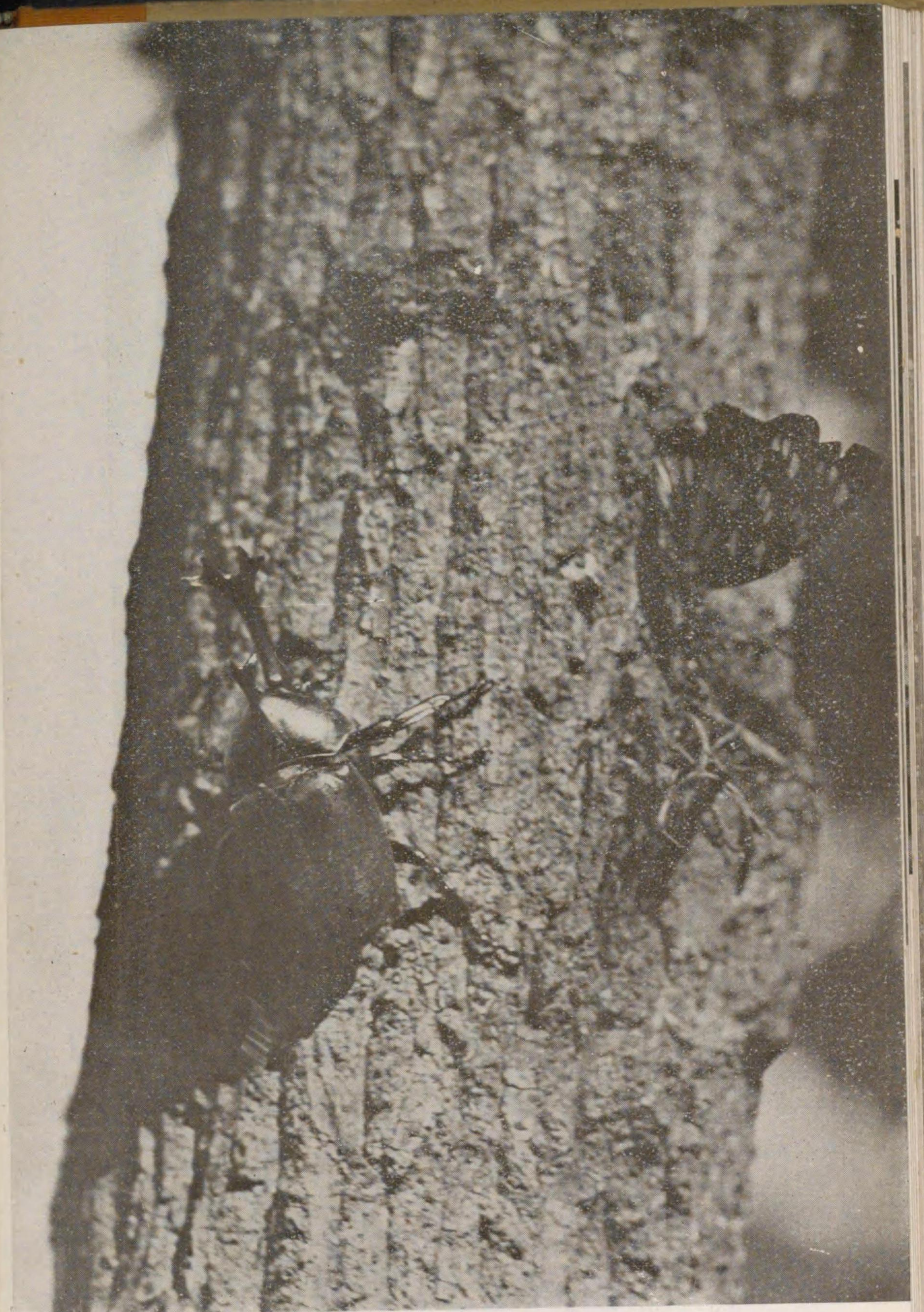
學名：*Pieris rapae* Linnaeus

Plate 43 樹液に集る昆虫群

栗、櫟等の幹から汁の流れ出して居る處には色々な昆虫がそれを甜めようとして集つて来る。中でもカブトムシやクハガタムシは愛嬌者である。その他大勢の中には蠅、虻、コメツキムシ、ケシキスヒ或はゴマダラテフ、ルリタテハ、オホムラサキ等翅色美しい蝶の面々等に至るまで数多くの昆虫が見られる。

2593年7月：駒澤：Time 1/15

學名：*Xylotrupes dichotomus* Linnaeus (カブトムシ)





44

Plate 44 藪 蔭

日のよく當つて居る笹の葉に、アリノスアブが一匹止つて
背中を輝かせて居る。活動の合間の一休みであらうか。

此の虻の幼蟲は蟻の巢に寄生するので、此の名がある。

2593年5月25日：用賀：Time 1/35

學名：*Microdon japonica* Yano

Plate 45 しほからとんぼ

そ一つと前から近づいてカメラを向けると、つと飛び退いて又止つた。別に危険を感じないと思つたのか、頭をくりくりと廻して、水平にして居た翅を段々下向きにし出した。此の時は蜻蛉の最も落つて居る場合らしい。シャッターを切つて體を動したとたん、周章て、何處かへ飛んで行つたが、寫してさへしまへばもう用はない。



45

2596年6月：石神井：Time 1/50

學名：*Orthetrum albistylum* Selys



 Plate 46 早 春

ミヤマセセリは春先早く出る蝶である。未だ枯草に被はれた野原に此の蝶の姿を見る時は、陽春の近きがしのばれ、何となく懐しいものである。

暖かく晴れた野邊には枯草の間から何やら小さな嫩葉が萌えて居る。小さな蠅が元気に飛ぶ。そこへ勢よく飛んで来たのは去年の秋澤山居たキタテハだ。見れば粉も落ち、處々剥げて翅がすきとほつて、破れた處もあるが、元氣よく飛び廻つて居る。——二月の末頃郊外へ出れば、此の様な光景が處處に展開する。

2595年5月：石神井：Time 1/50

學名：*Thanaos montanus* Bremer

Plate 47 羽 化

土中に轉つて居る生きて居るのか死んで居るのかわからない様な蛹が、時期を得れば羽を得て空中を飛び廻るに至る。

今將に脱皮を終へて進空せんとするガガンボの一種、腹端は未だ蛹殻中にある。

昆蟲が羽化する際には、體に多量の空氣を含んで、その壓力と彈力で蛹の殻から出るものである。寫真に見られるガガンボの腹部は甚だ大きいが、體が固るにつれて中の空氣は少くなるのである。



2593年4月：石神井：Time 1/30

學名：*Tipula* sp.



Plate 48 美しい小蠅

美しく伸び切つた葉の上に，飛んでは止り，止つては飛ぶ
美しい小蠅，アシナガキンバヘである。

透きとほつた翅と金緑色に輝く體が，淺緑の葉に映じて又
となく美しく，又可憐である。寫眞はイチヂクの葉上に止つ
て居る處，その後方の粒々は水滴。

2593年5月：駒澤：Time 1/35

學名：*Dolichopus nitidus* Fallén

Plate 49 泡吹蟲

木の枝に白い泡をつけて居るのが、よく見られるものである。これはアワフキムシの幼蟲が作る巢であつて、その中に棲んで居るのである。

泡は幼蟲が成長するに従つて大きくなり、時としては二匹共同生活して居る場合もある。泡の中では必ず下向に止つて居て上を向くことはないが、親になるとその反對である。

アワフキムシの親は極めて蟬によく似て居る小さい蟲で、泡は絶対に作らない。日本には可成り澤山の種類がある。

寫眞の左隅はシロオビアワフキ（約二倍大、標本）



2593年5月：用賀：Time 1/50

學名：*Aphrophora intermedia* Uhler

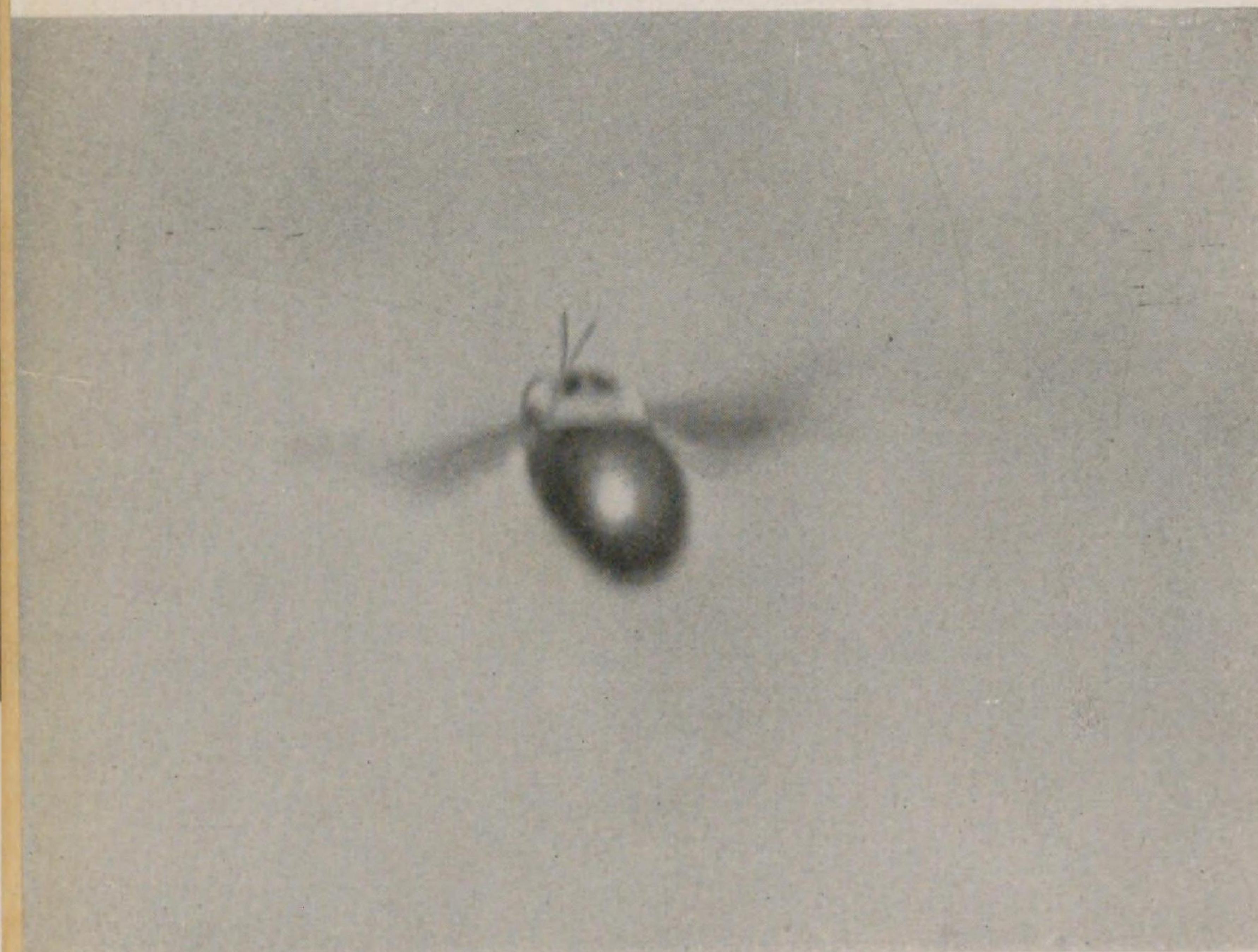


Plate 50 五月の朝

紫匂ふ藤の花に澤山のクマバチが、羽音高く蜜を求めて居る。或るものは餌に飽いたのか、或は高く、或は低くその附近を飛翔して居る。雌を待ち伏せて居るのであらうか、時々雌の姿を見つけるとどこまでも追つて飛んで行く。

クマバチはヒラタアブと同様じつとして浮かぶ時間があるから、その機を逸せずシャッターを切らなければならない。

2595年5月：石神井三寶寺池畔：Time 1/100

學名：*Xylocopa appendiculata* Smith

Plate 51 ハンノキの害蟲

春先ハンノキの葉を食ひあらず幼蟲にミツクリハバチがある。眞白な蠟を被つてどこが頭とも判り兼ねるが、これが爲葉はアラメの様に孔をあけられてしまふ。やがて一月もたてば幼蟲の姿は消えて、親となつた成蟲がその周圍を澤山飛び廻る。



2593年5月23日：用賀：Time 1/50
學名：*Eriocampa mitsukuri* Rohwer

Plate 52 ばつた

よく晴れた初秋の草原である。色々な種類のバッタが盛に飛んで居る。一匹のシャウリヤウバッタにカメラを向けるとピントを合せる間もなく飛び立つた。降りて將に次の飛翔に移らんとして準備中の處。

52



2593年9月19日：浮間ヶ原：Time 1/50

學名：*Acrida lata* Motschulsky

Plate 53 早春の路傍

路ばたのキツネノボタンに蜜を漁る一匹の小甲蟲モモブト
カミキリモドキ。黄金の花びらと瑠璃色の蟲體とは美しい自
然の調和である。

路傍に色々な草花が咲く頃になると、小さな昆蟲が蜜を求
めて集つて来る。山の花には平地に見られない色々な變つた
種類が見られるものである。

2596年4月14日：小佛峠道：Time 1/50

學名：*Oedemera montana* Marseul





Plate 51 樹蔭に憩ふ

キマダラヒカゲは花に來ない蝶である。樹から出る汁や馬糞を食として居り、少し薄暗い樹蔭にはよく見受けられる。そして好んで幹に止り、休息して居る。

花に來ない蝶には澤山の種類がある。ヒヲドシテフ、ルリタテハ、ゴマダラテフ、コムラサキ、オホムラサキ、コノハテフ等は代表的とも云ふべきで、是等は馬糞、樹液、腐つた果實等を好むものである。それであるから、うつかりこんな種類を花にあしらつて繪を描いたならば、それこそ物笑ひの種となる。

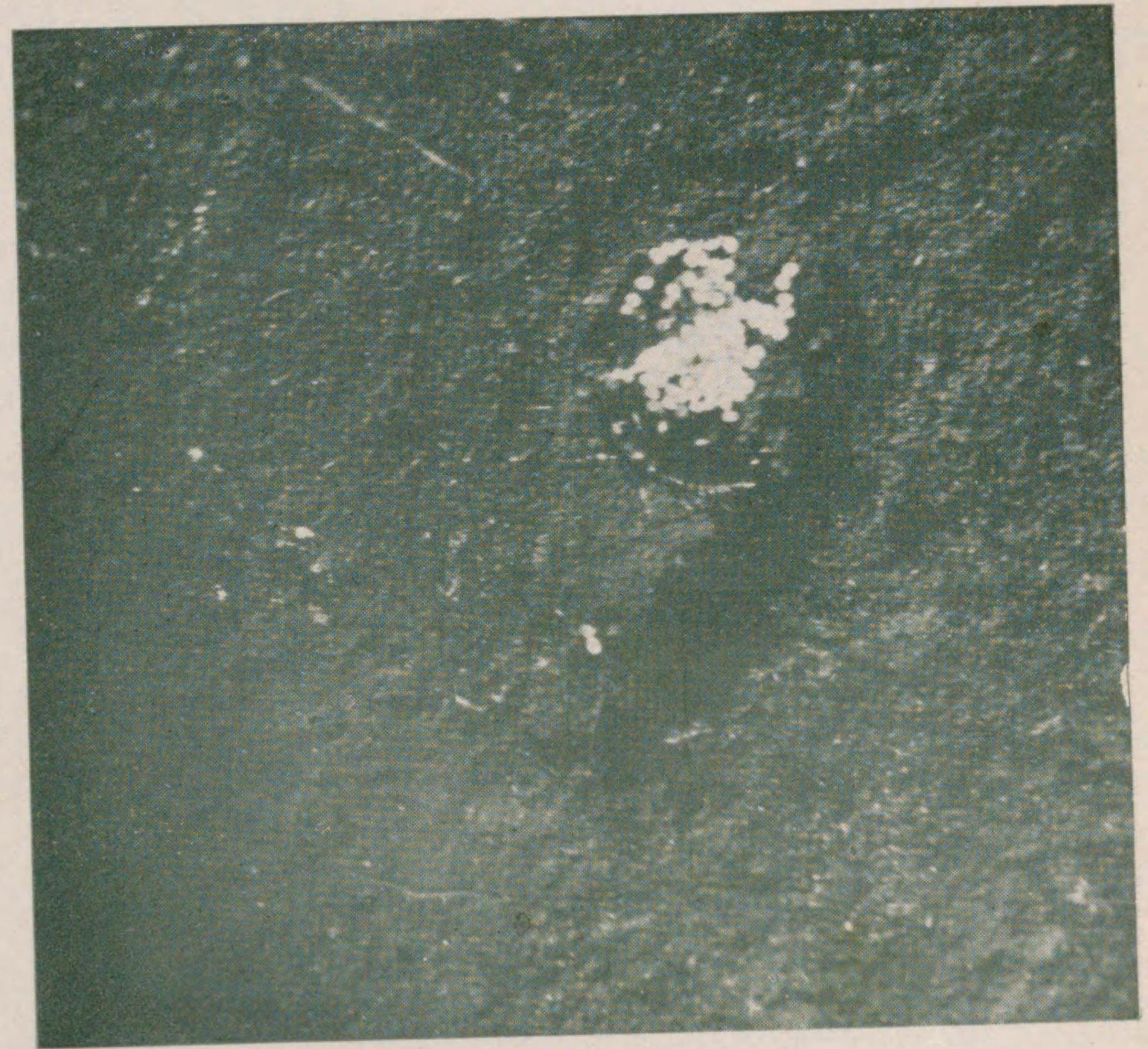
2593年5月：駒澤：Time $1/50$

學名：*Neope gschkewitchii japonica* Butler

Plate 55 はさみむしの母性愛

ハサミムシは子供を育てるので、母性愛の代表者として有名である。

塵芥箱を除けて見ると、その下にヒゲジロハサミムシが浅い穴を穿つて卵を抱いて居た。此處は日蔭で光線が足りない處、鏡で日光を反射して寫したものである。



55

2593年5月：駒澤：Time 1/30

學名：*Anisolabis marginalis* Dohrn



Plate 56 飛 翔

浮かんだ如く，吊り下げられた如く，じつとして居るかと思ふと，急に思ひ出した様に何處へか飛んで行つて，又元の處へ戻つて何事があつたかと云ふ様な姿で浮んで居る。赤褐色の頭，金色の胸，虎斑模様 of 腹を持つたヒラクアブが，樹の間に陽光を受けて飛んで居る姿である。

飛翔中の翅の動かし方や肢の位置がはつきりと判らう。

2593年5月20日：駒澤：Time 1/100

學名：*Syrphus balteatus* De Geer

Plate 57 蜂の巢

家の羽目板にキボシアシナガバチが巢を作つて居る。一端の短かい柄を板に固定して順次築かれた巢房には、既に羽化した若い蜂が何匹か止つて、それを護つて居る。

巢を護つて居る蜂は、人の姿を見ても決して逃げようとし
ないから、撮影は樂である。然し驚かすと、蜂が怒つて向つ
て來るから、注意しなければならない。



57

2593年5月：駒澤：Time 1/50

學名：*Polistes mandarinus* Saussure

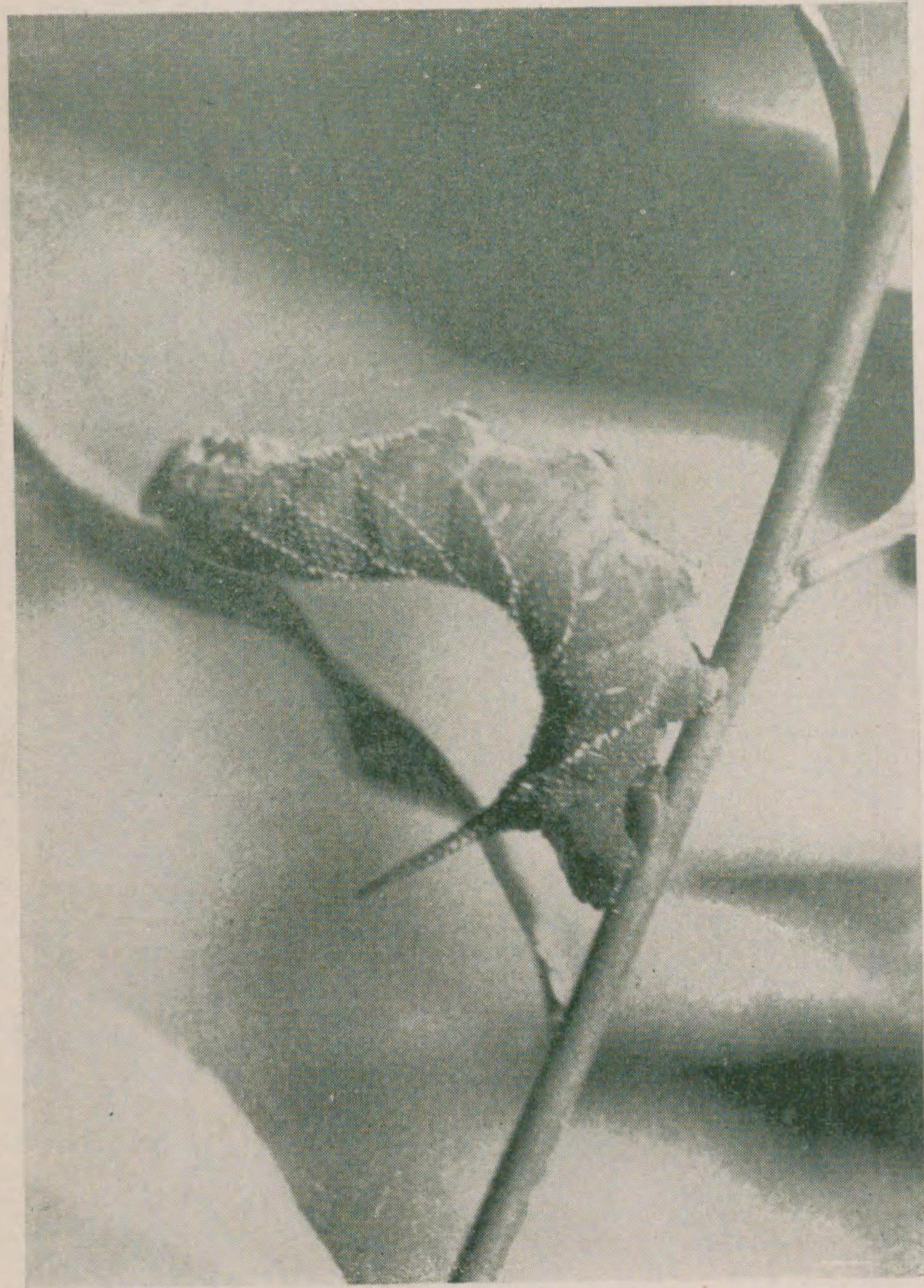


Plate 58 威 嚇

桃の枝に一匹のモモスズメの幼蟲が止つて、葉を食つて居る。頭を小突いたらこんな姿勢をした。氣持の悪い姿である。

蛾の幼蟲には薄氣味の悪いものが澤山ある。芋畑に多いイモムシ（セスズズメの幼蟲）にしても、側面の眼狀紋が役立つで一層氣持の悪い姿に見えるのである。

周期的に頭を振るフクラスズメ、體を縮めると物凄しい姿になるアケビコノハ、長い肢をフラフラ動かして居るシヤチホコムシ等種類は多いが、體の色が植物に似て居る爲に見つけ難いものが多い。

2593年4月：駒澤：Time 1/35

學名：*Marumba gaschkewitschii echephron* Boisduval

Plate 59 こまいまいかぶりの幼蟲

ゴミ捨場の近くを見ると、コマイマイカブリの幼蟲が這つて居る。藍黑色に光る體が何となく毒々しい。

此の類はカタツムリを常食にして居り、その殻の中に頭を突込んで居るので、マイマイカブリと云ふのである。時としては、カタツムリの殻を頭にかぶつて歩いて居るものも見られる。

ゴミ捨場附近にはシデムシ、ゴミムシ、ハネカクシ等腐敗物を食とする昆蟲が多い。

2593年9月：駒澤：Time 1/50

學名：*Carabus blaptoides lewisi* Rye





60

Plate 60 鳶色角蟬

長さ七八ミリの小蟲であるから、餘程注意しないと見つからない。クヌギや檜の小枝によく見られるが、一見瘤か芽に似て居るので、蟲とは思へないかも知れない。

バックに白紙を置き、光を反射させて寫したもの。

2592年10月：駒澤：Time 1/30

學名：*Machaerotypus sibiricus* Lethierry

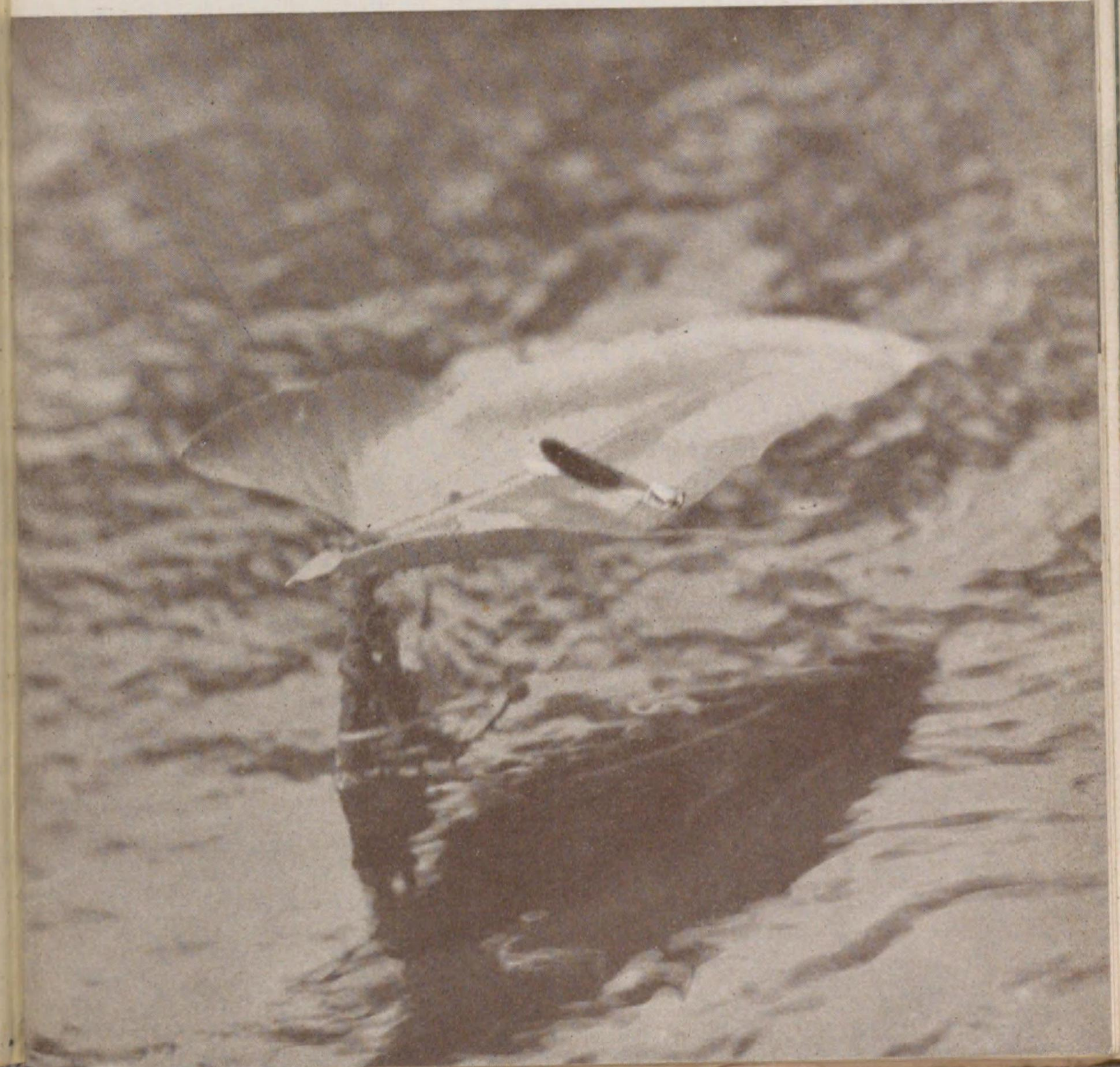
Plate 61 清 流

小川の底迄見える美しい流れ。今しも一匹のカハトンボが
ゆらゆらと首を振つて居る河骨に憩うて、時々美しい橙赤色
の翅を擴げては又閉ぢて居る。その近くを飛び過ぎた仲間の
あとを追つて、水面低く上流の方へ姿を消した。

2933年6月：石神井公園：Time 1/50

學名：*Mnais costalis* Selys

61



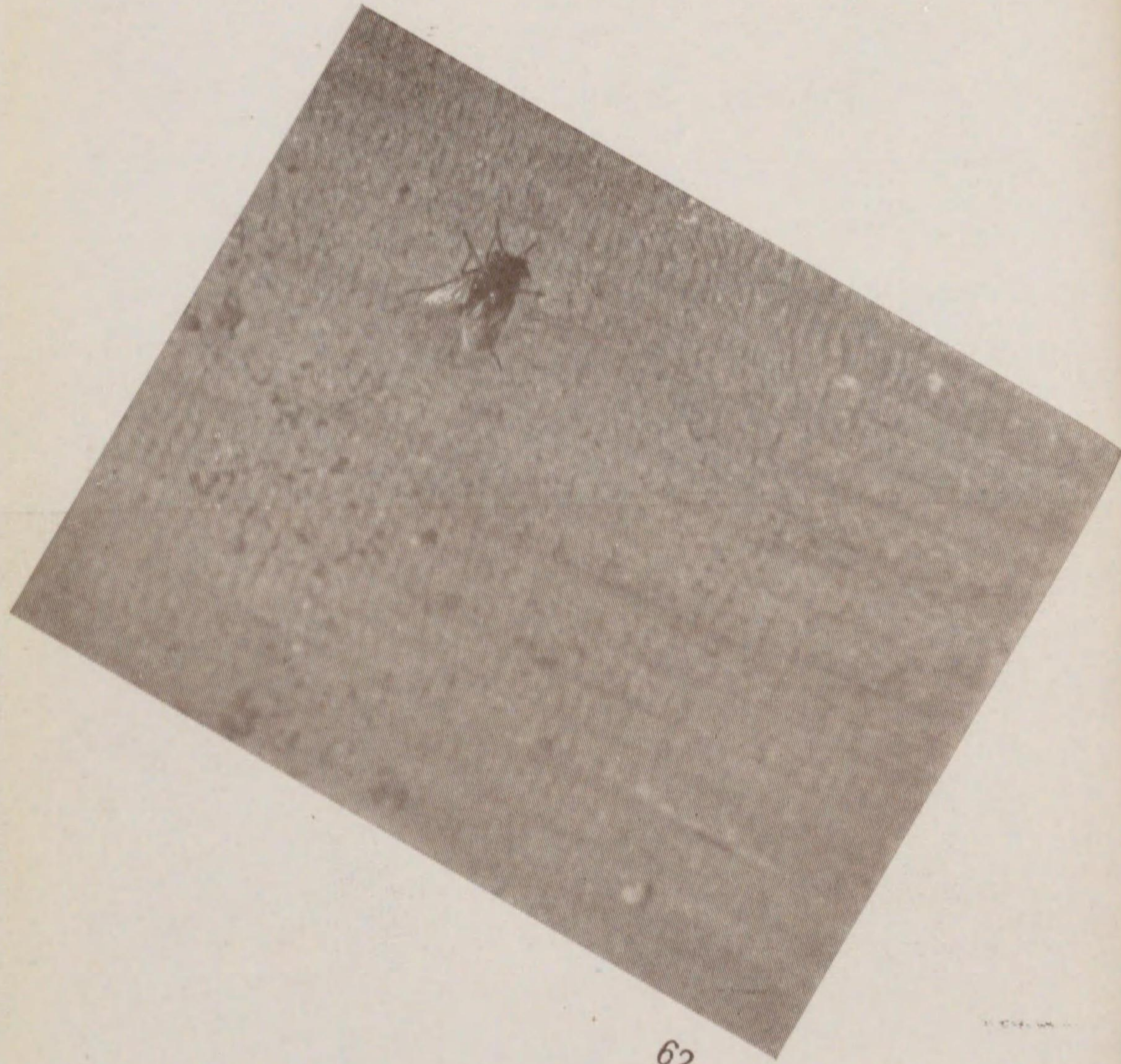


Plate 62 日當りよき板塀・家蠅

麗かな早朝, 日當りの好い板塀に一匹の家蠅が止つて居る。
家蠅は家の中に澤山飛んで居るが, 至つて寒さ嫌ひで, 日當りのいゝ處には澤山集つて来る。

蠅類は日向を好むものである。寒い冬の日でさへも, 日のよく當つた電柱や板塀には大小色々の種類が見られる。中で最も大きな黒藍色をしたクロバへはどんな嚴冬でも姿を現はす元気な蠅である。

2593年5月：駒澤：1/50

學名：*Musca domestica* Linnaeus

Plate 63 大根畑

早春天氣のいゝ菜畑，大根畑等を訪れると，口ばしの長い，體に褐色の長い毛を持つたビロウドツリアブが，その長い口を花の奥に挿し込んで，蜜を吸つて居る姿がよく見受けられる。忙しさに，その間も決して翅を休めず動かし續けてゐる。早春の愛嬌者である。



63

2593年5月：用賀：Time 1/50

學名：*Bombylius major* Linnaeus

Plate 64 おほひらたあぶの飛翔

林の中の日の射す處にハナアブやヒラタアブの類が、じつと吊り下げられた様に飛んで居て、時々思ひ出した様に飛び去つて行く姿がよく見られるものである。此の類は花の蜜を食物として居るのであるから、斯うして餌を待ち伏せて居るわけではない。何の理由か不明であるが、此の様な習性のある以上は、何等か理由のあることには違ひない。遊戯であらうか。

寫眞はオホヒラタアブの飛翔。下から寫したもので、腹部の斑紋がすけて見えて居る。

2593年5月3日：用賀：Time 1/100

學名：*Syrphus ribesii* Linnaeus

Plate 65 群 棲

萌えて間もない櫟の枝に、クリノオホアブラムシが眞黒に群つて居る。卵で冬を越したのが、一陽來春と共に生れたものである。

アブラムシの類は總て群棲する。春先若芽を調べると、緑、黄、黒等様々な色を持つた種類が見られやう。中でもクリノオホアブラムシは大形の種類である。



65

2596年4月：武藏景信山：1/40

學名：*Pterochlorus orientalis* Van der Goot



Plate 66 産 卵

冬が近づいて来たのでオホヨコバヒは今しも産卵に大忙しである。栗、桃、リンゴ其の他色々の果樹には、根際に澤山集つて産卵して居る。春から秋へかけて何遍となく産卵して居るが、それは多く草であつて、冬は必ず樹に産む。これは冬を越して翌春孵化するのである。

2596年11月27日：石神井：Time 1/30

學名：*Cicadella viridula* Linnaeus

Plate 67 ななふし

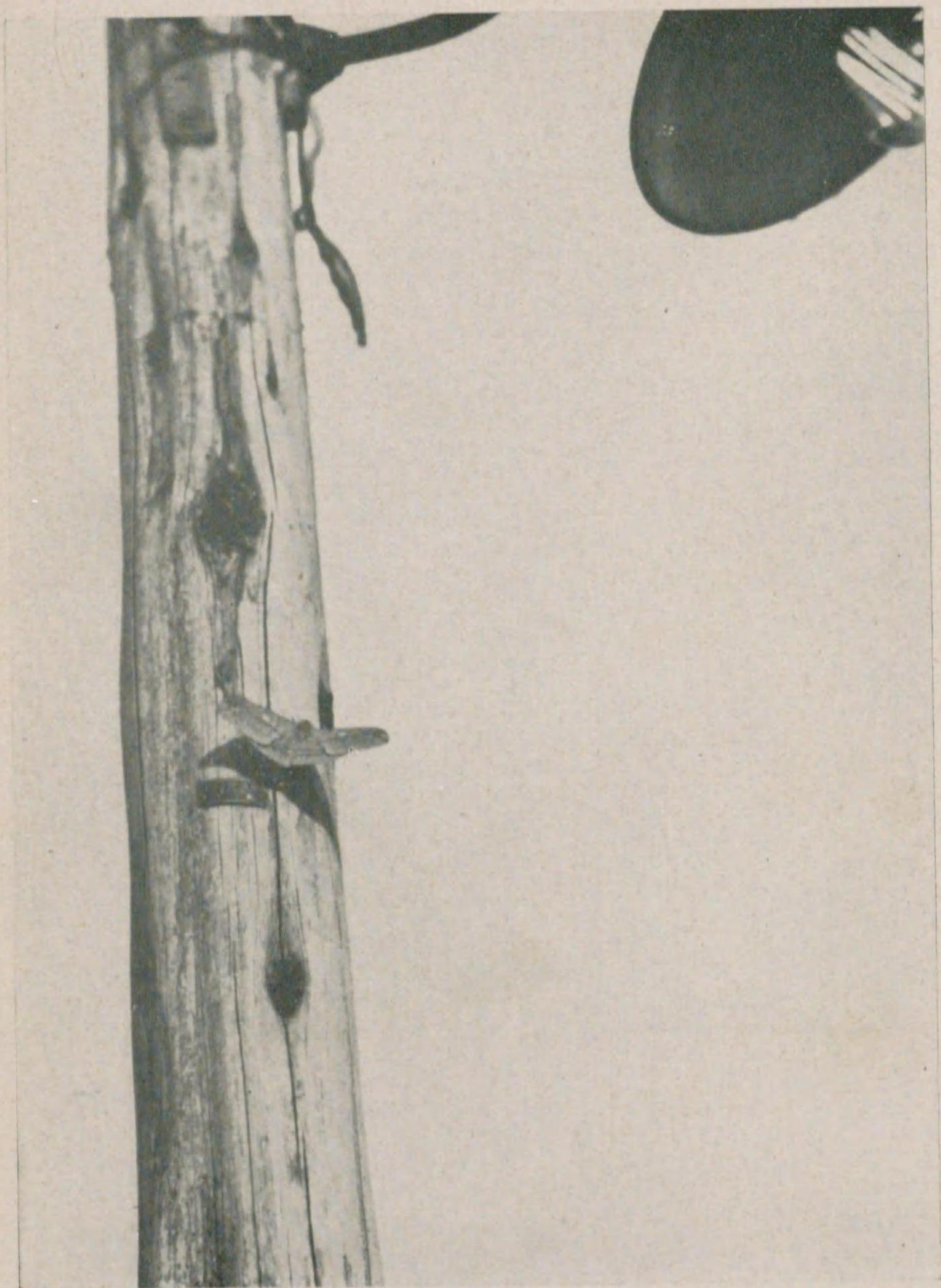
枯枝が歩き出した様な昆虫である。人が近づけば肢を伸して地上へ落ちて来る。これが樹の枝等に止つて居るとまるで見わけがつかない。餘り感じのいゝ蟲ではない。英語で此の類を Walking stick と云ふ。日本では竹節蟲, 青トカゲ等とも云はれる。



67

2595年6月：石神井：Time 1/50

學名：*Phraortes elongatus* Thunberg



68

Plate 68 翌 朝

昨夜電燈に飛んで來たウスタビガが朝になつても山へ歸らうとしないで電柱に止つて居る。あたりが薄暗くなつて、電燈の光が輝き始めると、再び活氣附いてその周圍を飛び廻るのであらう。

2596年11月20日：石神井：Time 1/50

學名：*Rhodinia fugax* Butler

Plate 69 生き残つた蠃螂

もうヌルデの紅葉も褐色に變つて落ちようとするのに、未だ卵も産まない大きな腹をした一匹のカマキリが幾日も同じ處に霜に打たれ乍ら止つて居る。生きては居るのだ、時々鎌を動かして居るから、然しもうその邊には餌になる様な蟲は飛んで來ない。

2596年12月4日：石神井：Time 1/30

學名：*Paratenodera aridifolia* Stoll





 Plate 70 陽溜り

庭の一隅に雑木林がある 南側の處に薄や笹が生えて居て
 日が當つて居ると、眞冬でも春の様に暖かい。蟲仲間はそれ
 をよく知つて居ると見えて、こゝへ集つては冬の日を過して
 居る。寫眞は今しも一匹のハナアブが薄の枯葉に止つてお化
 粧最中の處。

2596年12月15日：石神井：Time 1/30

學名：*Eristalomia tenax* Linnaeus

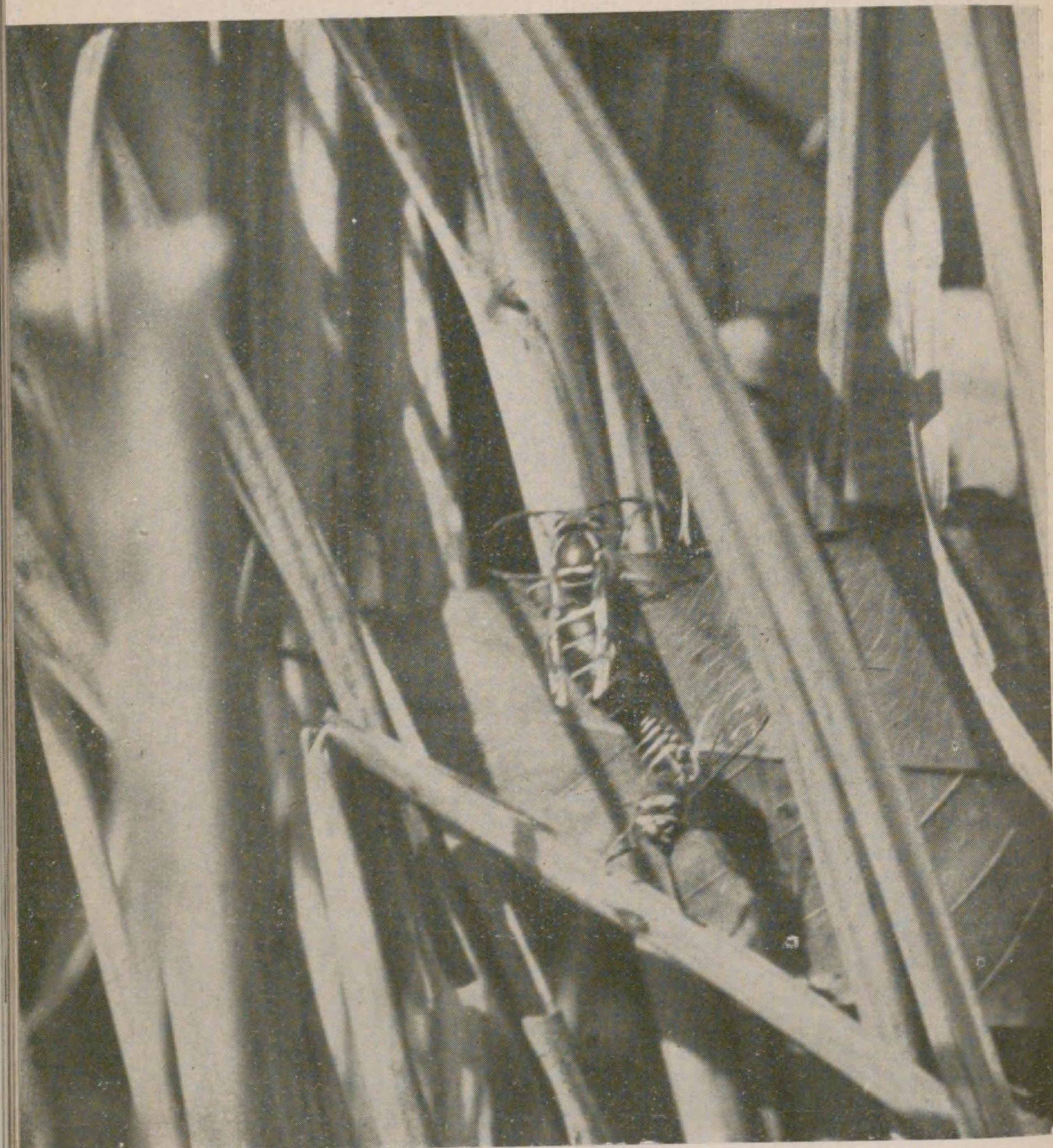
Plate 71 黒雀蜂 (その一)

カメラを提げて、何か獲物はないかと庭の中を物色して歩いて居ると、雑木林の枯薄に引かゝつたクヌギの落葉に一匹のクロスズメバチが冬の陽を體一杯に受けて止つて居る。すると、そこへもう一匹形の小さいのが飛んで来て交尾を始めた。後から来たのは雄であつた。

2596年12月15日：石神井：Time $1/30$

學名：*Vespa japonica* Saussure





72

Plate 72 黒雀蜂 (その二)

その次に雄は雌の背から離れ、逆にぶら下つた。此の時は翅を全く動かして居ない。

此の蜂を長野縣では地蜂と稱し、巢に居る幼蟲を食用に供する。蜂類中極めて美味であると云ふ。

2596年12月15日：石神井：Time $\frac{1}{30}$

學名：*Vespa japonica* Saussure

Plate 73 秋 茜

アキアカネはトンボの中で一番遅く迄生きて居る種類である。幾日かひどい霜の日を過しても、日さへ照れば元気で飛び出して来る。

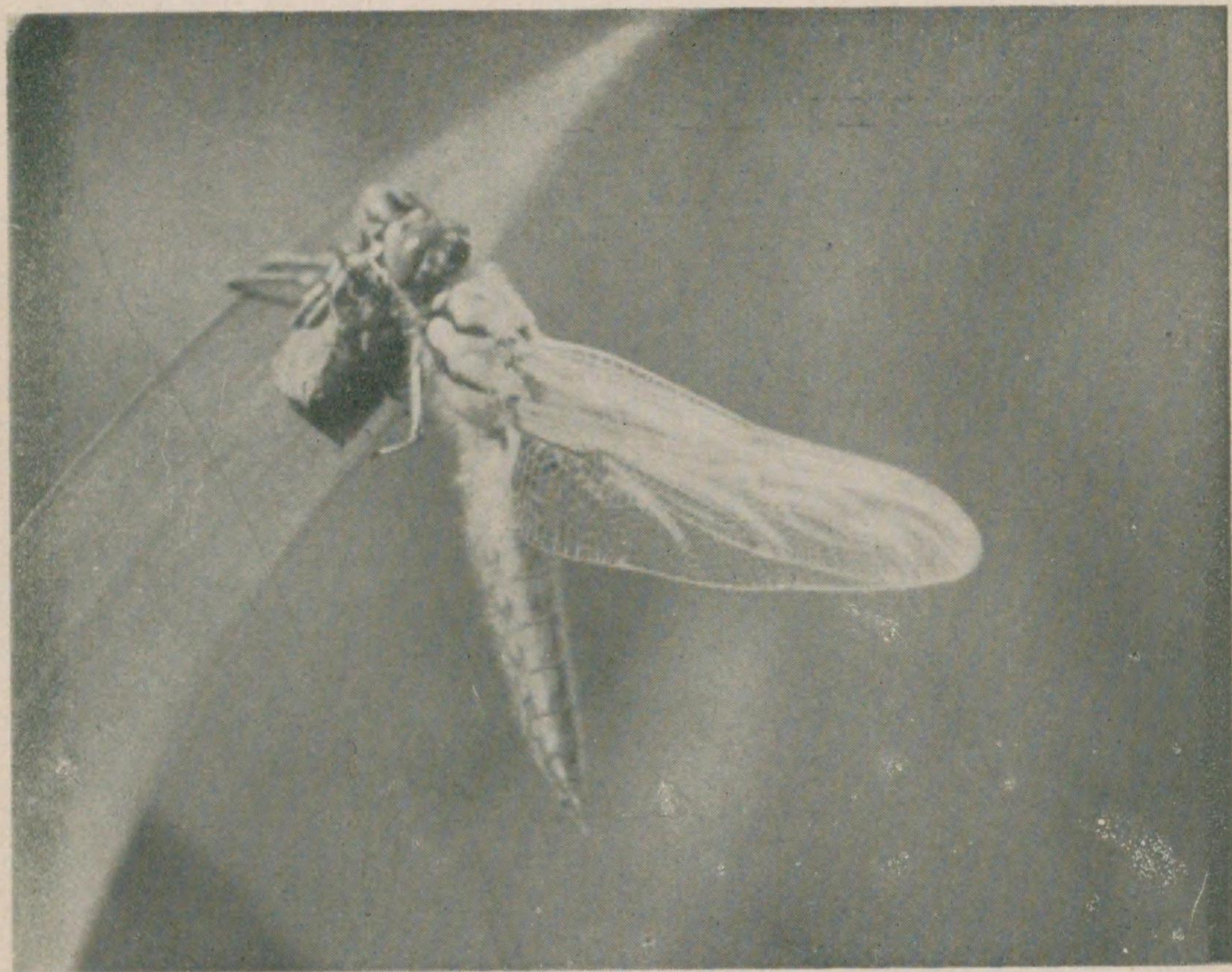
これは陽當りのいゝ檜の幹に憩つて居る姿である。



73

2596年11月25日：石神井公園：Time 1/30

學名：*Sympetrum frequense* Selys



74

Plate 74 蜻蛉の羽化

陽春の日光を體一杯に浴びて一匹のヤゴが花菖蒲の葉に登つて來た。葉先にしつかりつかまつてやがて背中からヨツボシトンボが現はれて來た。ヤゴの短かい腹からどうしてこんな大きなトンボの腹が出るのであろうか。丁度ゴム風船をふくらます様に空氣の壓力で膨らんで行くのである。すつかり出てしまつた蜻蛉は翅を立てゝ居るが、やがて體が固まると共に翅は水平に開いて飛び去つて行くのである。

2595年5月：石神井公園：Time 1/50

學名：*Libellula quadrimaculata* Linnaeus



昆蟲生態寫真と寫し方

昭和十三年八月十七日印刷・昭和十三年八月二十日發行

普及版

著者 かと う きよ 加藤正世

發行者 岡本正一

東京市麴町區六番町六番地

印刷者 谷口熊之助

東京市麴町區五番町十二番地

定價一圓五拾錢

印刷所 合資 谷口印刷所

東京市麴町區五番町十二番地

東京市麴町區
六番町六番地

厚生閣

振替東京五九六〇〇番
電話 九段 三二一八番

分類 原色日本昆蟲圖鑑

加藤正世著 全十二輯 〈分賣〉

★一匹一匹全原色版——堂々五千種のコレクション。學者の監修や片手間の仕事でなしに、研究と採集の實際權威が、心魂を打込み一々製版所に出かけての責任出版

★採集をする人々に——各冊とも目別による昆蟲の生態の概略、並びに標本作成上の注意を附載し、他に鳴聲・學名・分布・索引等、實に、到れり盡せりの採集手引

★研究をする人々に——標本その儘の色彩と形態を持つ

が故に、苦心して標本を蒐集する煩が省け保存の手數が要らぬ。目別分冊になつてゐる點で選擇購入に至便
★趣味を持つ人々に——美しい豪華版十二冊を揃へれば、少くとも昆蟲の日本にある凡てを網羅し得て堂々書架の偉觀！

第一輯	革翅目 (はさみむし類) 直翅目 (ばつた. きりぎりす類)
第二輯	蜻蛉目 (とんぼの類)
第三輯	同翅目 (せみの類)
第四輯	同翅目 (よこばい. うんかの類)
第五輯	異翅目 (かめむしの類) 脈翅目 (かげろうの類) 積翅目 (かはげらの類)
第六輯	鱗翅目 (蝶)
第七輯	鱗翅目 (蛾・蝶)
第八輯	鞘翅目 (かぶとむしの類)
第九輯	鞘翅目 (//)
第十輯	雙翅目 (あぶ. はいの類) 膜翅目 (はちの類)
第十一輯	鱗翅目 (蝶)
第十二輯	鱗翅目 (蛾)

☆昆蟲の最大の日本版コレクションとして有名

各輯 新四六判豪華美本 定價各二圓五十錢 送料各十四錢
函入・各輯解説附

子供の昆虫学

加藤正世著

昆虫は子供の生活と離して考へることの出来ない生物であるが、この昆虫を單なるムシケラとしてのみ玩弄する子供の生活は、その第一歩から不幸である。その興味を正しく指導し、子供の生活を科学的に訓練することは誠に緊要なことである。

然も若し、此の指導の第一歩を誤れば、そのいゝ加減な知識から來る害は終生つき纏ふものであるが故に、子供には子供なりに、子供だましてなく、平易な“學術書”が與へられなければならない。

著者は此の意味から、挿繪寫眞の隅々に至るまで異常な注意を拂ひ、専ら子供の爲の昆虫學書として他の追従を許さない正確な著述を完成した。

子供に喜びを與へ、父兄に信頼を得る“唯一の子供の昆虫學書”として、自信を以て大方に推奨する。

四六判細布裝函入二百五十頁 挿繪寫眞版二百餘挿入案附 ¥ 2.30 (〒.14)

ファープル 蟲物語 《全六卷》

農學博士 横山桐郎實際監修

ファープルの有名な昆虫記を、全部子供の爲に平易に書き直した“物語體の昆虫書”である。科學知識を童話風の形式の中に織込んで剩さず、讀んで此上なく面白く然も知らず識らずのうちに正確な知識を掴ませるといふ“一石二鳥式科學書”を完成したもの。譯著者は全部一流の童話家である。

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 第一卷 (こほろぎ、きりぎりす其他)
水谷まさる譯著 | 第五卷 (蜂類其他)
鎌田實吉譯著 |
| 第二卷 (くも類、ほたる其他)
今田謙吾譯著 | 第六卷 (松の木行列蟲其他)
濱田廣介譯著 |
| 第三卷 (こがねむし類其他)
千葉省三譯著 | 別冊 少年昆虫採集法
厚生閣編輯部編著 |
| 第四卷 (せみ、かまきり其他)
須崎邦武譯著 | (採集の仕方、標本の作り方、其他) |

各冊 四六判美裝函入三五〇頁 口繪其他挿繪豊富 各冊 ¥ 1.50 (〒.12)

蝶蛾の研究

中川元治郎著

量に於て未曾有の高峰を築き、その質に於て斷然他の群小類書を凌駕す。日本産蝶蛾の實に尠大多彩なる研究書。専門書中に得難き一大文獻として輝き、蝶蛾に興味を有する一般讀者への興趣盡きざる面白い科學書。

《内容一斑》

- | | |
|---|---|
| 第一章 昆虫學上の蝶蛾
第一節 蝶翅學と鱗翅目
第二節 蝶蛾の數と大小
第三節 蝶蛾の別
第四節 進化の系統 | 第七章 習性
第一節 趨性
第二節 本能
第三節 智的行爲
第四節 棲息
第五節 移動
第六節 營養 |
| 第二章 外部形態
第一節 成蟲
第二節 皮膚
第三節 頭部
第四節 胸部
第五節 翅
第六節 脚肢
第七節 腹部 | 第八章 適應
第一節 器官の變化
第二節 形態の變化
第三節 色彩の變化 |
| 第三章 内部組織
第一節 膜狀骨と内胸板
第二節 筋肉系
第三節 血管系
第四節 神経系
第五節 消化器
第六節 呼吸器
第七節 生殖器
第八節 腺
第九節 感覺器 | 第九章 蕃殖
第一節 氣候關係
第二節 地勢關係
第三節 植物關係
第四節 動物關係
第五節 自然の均衡 |
| 第四章 發生
第一節 發育
第二節 卵子
第三節 幼蟲
第四節 蛹
第五節 成蟲體の更新
第六節 羽化 | 第十章 人類との關係
第一節 有益蟲
第二節 有害蟲
第三節 藝術化 |
| 第五章 生殖
第一節 種類
第二節 交尾
第三節 性生活
第四節 性の決定
第五節 雌雄の數 | 第十一章 分布
第一節 大陸分布
第二節 日本の地位
第三節 分布の變動
第四節 傳播
第五節 原産地の決定 |
| 第六章 經過
第一節 化生と同數
第二節 成蟲の生活期
第三節 一生 | 第十二章 分類
第一節 自然分類
第二節 形式
第三節 蝶蛾の分類 |
| | 第十三章 小蛾亞目
第一節 蠶蛾群
第二節 葉捲蛾群
第三節 蝶蛾群
第四節 鳥羽蛾群 |
| | 第十四章 大蛾亞目
第一節 尺蠖 |

菊判洋布裝函入 五八〇頁索引附 ¥ 5.80 挿入寫眞版 三百八十餘

寫眞 昆蟲採集便覽

加藤正世著

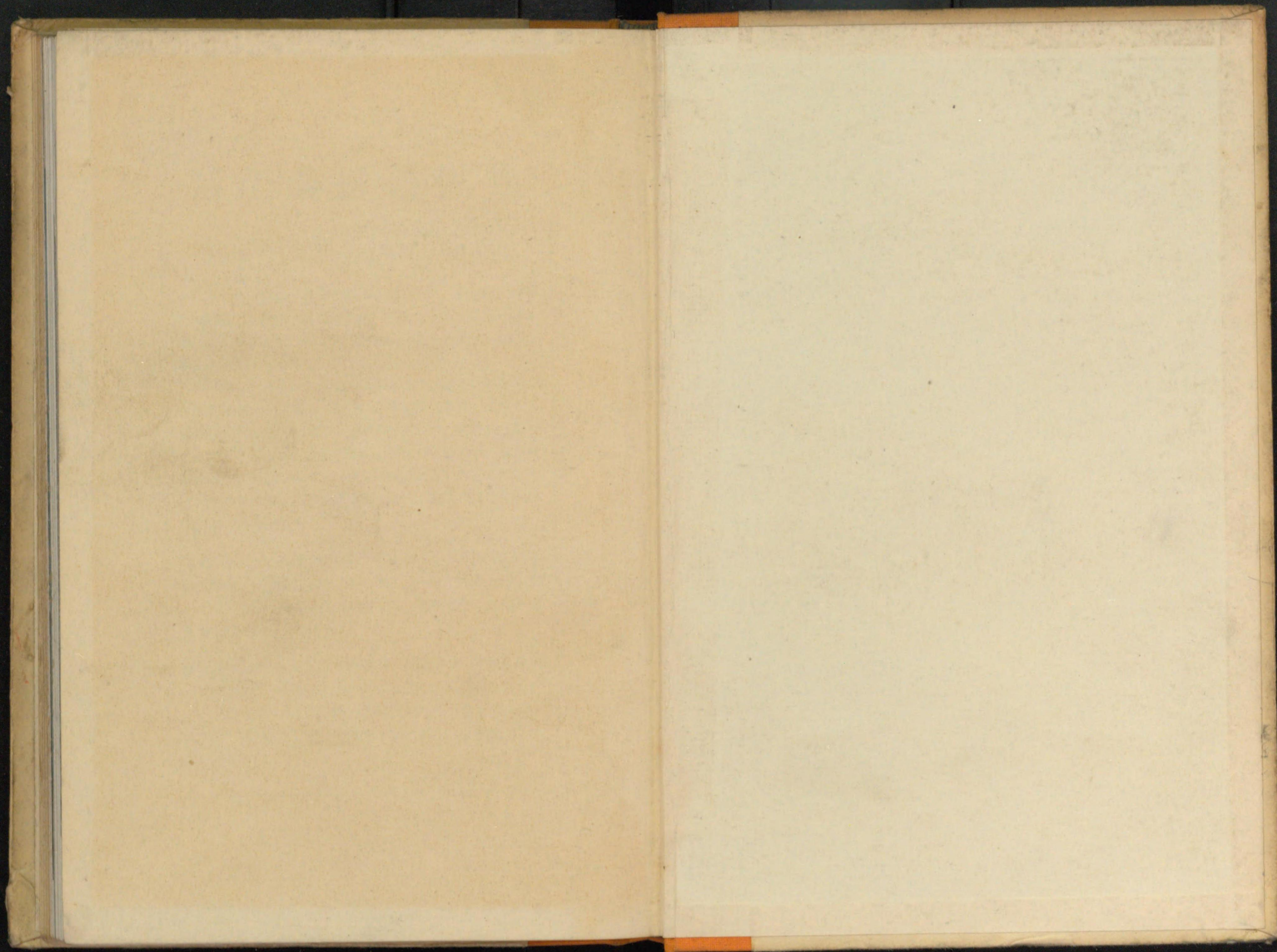
四六判布裝函入三百餘頁
定價二圓五十錢 送料十四錢

一から十まで全部が寫眞で圖解されてゐて、さながら野外で實地講習を受けてゐるやうだ。これなら全然昆蟲の棲み場所や、採り方や、保存の仕方や、昆蟲の名前さへ知らぬ人々や子供にさへ獨りでに分る。

* 専門學校の學生から小學生に至るまで、近時、科學的な一種のスポーツとして、全國に非常な勢で普及しつつある昆蟲に對する趣味を正しく導かんがために、實際昆蟲界のオーソリチイとして最高の權威を謳はれる著者が、多年實地指導を積まれた成果を、更に一般人にまで及ぼして新しく工夫され完成されたのが本書である。永き經驗と深き研究になる斯界の至寶！

★寫眞は——昆蟲の棲む林・森・畑・池・水邊等をさながら案内されて採集に自ら従ふ如く、一々その採り方が詳しく説明され、生態寫眞を以て昆蟲の姿を生けるが如く描き出されてゐる。

★記事は——休憩の合間の講話に相當する。昆蟲の分布から採集の乗・採集旅行の失敗談・藥になる昆蟲・學名こぢつけ集・等々、單に知識の寶庫たるのみでなく時にユーモアあり俳句あり、盡く空所を有効に利用して興趣つくる所を知らない。



760-15



1200501596613

15

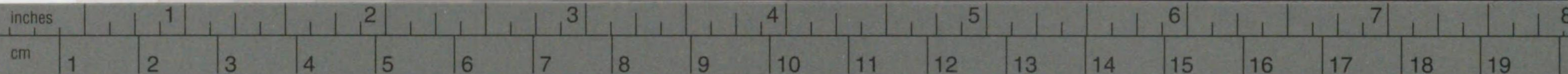
15

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

